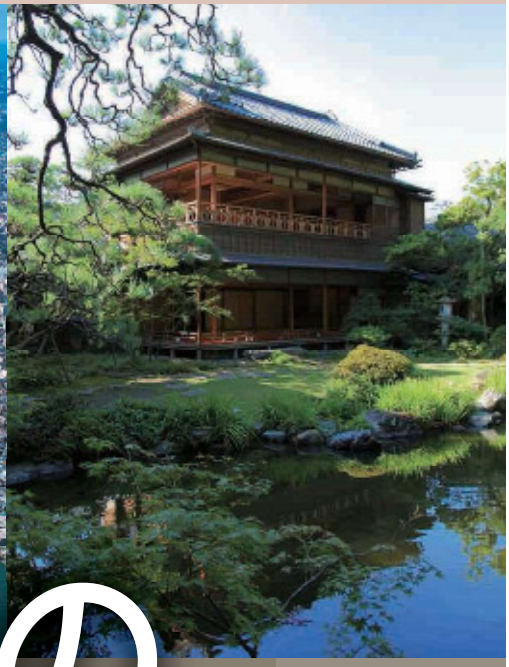
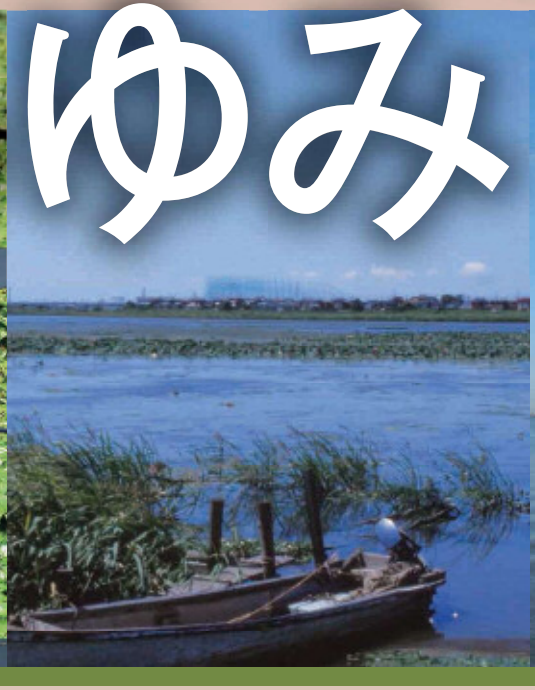


新潟市のあゆみ



水がつくり、水がむすぶ。
水とともに生きる新潟の歴史。

Niigata City
新潟市

目　次

新潟市の歴史（自然・原始～現在）　1

新潟市の歴史文化施設マップ　16

新潟市各区の歴史　17
（北区・東区・中央区・江南区・秋葉区・南区・西区・西蒲区）

近世（江戸時代末期）新潟市域の領分図　慶応３（1867）年　34

近現代（明治～平成）新潟市域の合併変遷図　35

新潟市歴史地図（市域の主な文化財）　36

新潟市歴史年表　38

主な参考文献　40

資料を閲覧するには～新潟市歴史文化課の利用案内　巻末

凡　例

本パンフレットは、平成19（2007）年4月に刊行した『新潟市のあゆみ』の増補改訂版です。

合併した新・新潟市域の歴史を時代順に記述した新潟市全体の通史を改訂するとともに、新たに新潟市8区の歴史（北区・東区・中央区・江南区・秋葉区・南区・西区・西蒲区）を叙述しました。

本パンフレット掲載の写真図版のうち、新潟市所蔵（歴史文化課、歴史博物館、文化財センター、新津鉄道資料館）のものについては、出典を省略しました。

本パンフレットの刊行には、多くの方々と機関のご協力をいただきました。お名前や機関名は省略しますが、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

本パンフレットは、新潟市文化スポーツ部歴史文化課の職員が分担して執筆しました。

〈表紙の写真〉

表：上左　信濃川河口上空から新潟市中心部を見る
右　夏の旧齋藤氏別邸庭園（国名勝）
下左　福島潟のオニバス
中　初夏の鳥屋野潟
右　信濃川と万代島（朱鷺メッセ・佐渡汽船）

裏：上左　雪の新潟税関庁舎（国重要文化財）
中　佐潟と角田山
右　紅葉した秋の中野邸美術館
下左　角田山上空から佐潟・新潟市中心部を望む
右　夕暮れの萬代橋（国重要文化財）

新潟市の歴史
（自然・原始～現在）

黄金色の稲穂が広がる越後平野

新潟市の位置

本市は、サハリン(樺太)から九州に及ぶ日本海に面した、本州のほぼ中央に位置している。東京圏からは約250km、名古屋圏からは約350km、大阪圏からは約500kmの距離に位置し、日本海をはさんだロシアのナホトカまでは約750kmの距離にある。市の中心部は信濃川の河口にあり、その後背には広大な越後平野が広がっている。

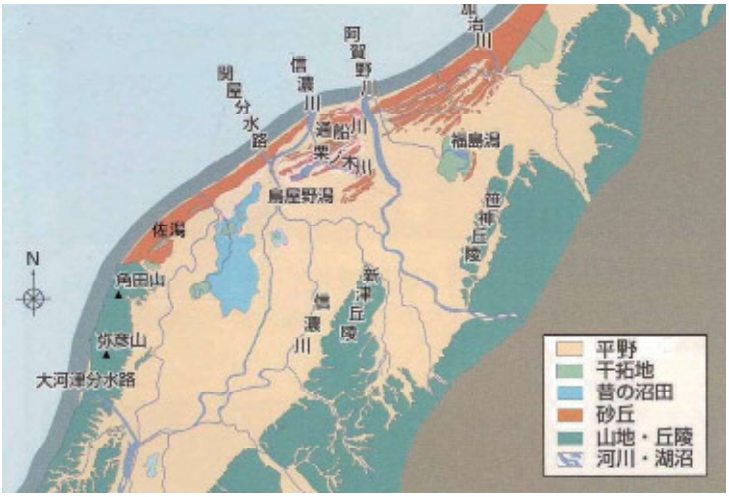
本市は海で日本海沿岸各地につながり、信濃川・阿賀野川水系によって、中越・下越地方（新潟県）の各地や会津地方（福島県）、北信地方（長野県）など、内陸部に結びついている。

北東アジアの中の新潟（『新・新潟市総合計画』より転載）

新潟市の地形

市域は、越後平野のほぼ中央に位置する。古くは、信濃川河口周辺が、越後平野ほぼ唯一の河口であった。

市域の大半は標高が低く、海抜ゼロメートル地帯を含む起伏の少ない平野が占める。市域西部の西蒲区に弥彦・角田山塊が、南部の秋葉区に新津丘陵があり、越後平野をはさむように連なっている。



越後平野の地形（原図「新潟平野の河川と放水路」を改変）

新潟砂丘

新潟砂丘は、長さ70kmに及ぶ日本有数の大砂丘である。現在の海岸線に連なっている砂丘が最も大きく、赤塚(西区)付近では標高52mに及ぶ。

約7,600年前ごろまでに葛塚(北区)ー亀田(江南区)ー布目(西蒲区)付近の海岸砂丘ができた。以後、海岸線に並行して10列にも及ぶ砂丘列が形成された。

新潟砂丘　手前は佐潟

内陸部の砂丘は、位置する地名をとって、亀田砂丘・石山砂丘などと呼ばれている。

越後平野

越後平野は南北約100km、東西約20kmに及ぶ日本最大級の沖積平野である。信濃川と阿賀野川によって運ばれた土砂が堆積して、約18,000年前から現在に至る間に形成された。

砂丘列の形成に伴い、その内陸側に平野が拡大していったが、平野は福島潟や鳥屋野潟をはじめとする大小さまざまな潟湖と低湿地が広がる不安定な地だった。江戸時代以降の新田開発や放水路の開削、さらに戦後の土地改良事業により、現在の様相になった。

潟　湖

平野部には、かつて大小の潟湖が多くあり、漁業やアシ刈り場などに利用されていたが、多くは近世以降の新田開発で姿を消した。市域には現在も福島潟（北区）・鳥屋野潟（中央区）・佐潟（西区）などが残り、貴重な自然遺産となっている。

これらの潟湖は、ヒシクイ、オオハクチョウ、コハクチョウといったガン・カモ類の集団飛来地となっている。福島潟や佐潟においては、ヒシ、ハス、ヨシの群落などが認められ、オニバス、ミズアオイ、アサザなどの希少な水生・湿生植物も見られる。佐潟はラムサール条約の登録湿地である。

福島潟

弥彦・角田山塊

海岸部にそびえる山塊で、北に標高481.7mの角田山、南に634mの弥彦山が連なっている。市域では、弥彦山山頂と峰続きの多宝山(たほうざん)が633.8mで一番高い。弥彦山は越後平野のどこからでも見え、海上では航海の目印になった。季節風の影響を受けるため、海側と平野側で植生が異なり、新潟県内の山々に自生する草木のほとんどを観察できる。春先にはオオミスミソウ（雪割草）やカタクリが山を彩る。

弥彦・角田山塊　右が角田山

新津丘陵

標高が約300m以下の起伏の小さな山地・丘陵である。開析(かいせき)(侵食)の進んだ丘陵で、緩やかな谷が深く入り込んでいる。標高は、秋葉山付近で83m、市域南端の菩提寺(ぼだいじ)山で248.1mとなっている。

古くから里山(たきぎ・山菜・果実・用水などの生活に結びついた山)として親しまれてきた。そのため、伐採後に再生したコナラやスギを中心とした植林地帯が広がる。また、わずかであるが、アカマツ群落、イヌシデとケヤキが混在する自然林が残っている。

新津丘陵　菩提寺山

新潟市の四季

春 3～5月

3月、青空の日が多くなり、積雪が消える。田打ちが始まる。5月、農村部で田植えが始まり、夏を迎える。

春　田植え　ＪＡ越後中央黒埼支店提供

夏 6～8月

田植えが終わり、田の草取りが続く。新潟の梅雨は連日の雨続きではなく、末期に集中豪雨になることが多い。7～8月に各地で夏祭りが行われる。台風によるフェーン現象が、厳しい暑さをもたらす。8月末になると、暑さが和らぐ。

夏　新潟まつり　萬代橋上の民謡流し

秋 9～11月

新潟を直撃する台風は少ない。収穫の季節、平野は稲穂で黄金色になる。刈り取った稲がハサ架けにされる。10月下旬、川でサケ漁が始まる。11月に入ると、雷鳴が響き、あられが降る。

秋　サケ漁　阿賀野川

冬 12月～2月

鉛(なまり)色の空の日が続き、雪混じりの北西風が吹く。積雪は、北陸地方の沿岸都市に比べ少ない。潟湖で越冬する白鳥や雁(がん)が、朝と晩に空を行き交う。２月は時折、青空が現れる。

冬　白鳥とカモ類　佐潟

暮らしの広がりと交流（原始・古代）

的場史跡公園（的場遺跡、県史跡）

営みのはじまり

市域における人々の活動の舞台は、はじめは丘陵と山麓であった。秋葉区の新津丘陵では、約2万年前の旧石器時代以降の狩猟具が点々と発見されている。西蒲区の角田山麓では、約14,000年前の狩猟具が最古である。

約6,000年前の縄文時代前期、人々は沿岸部に形成された砂丘に生活の舞台を広げた。最も内陸に位置する砂丘列にある笹山前遺跡（江南区）や布目遺跡（西蒲区）からは、縄文時代前期初頭の深鉢形の土器が出土している。

縄文前期の土器
笹山前遺跡出土
（市指定文化財）

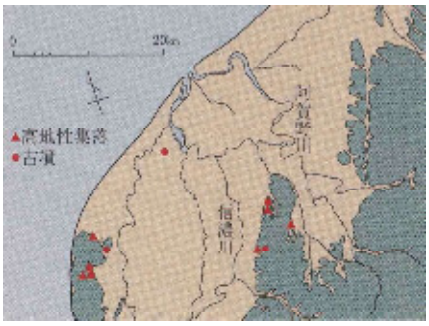
北と東の品物
古津八幡山遺跡（旧史跡）出土
左：アメリカ式石鏃
右：鹿角製鉄剣

交流と戦争

弥生時代、市域は西日本の文化と東北地方の文化が接する地域であった。北陸地方の特徴をもつ土器と東北地方の特徴をもつ土器がともに、六地山遺跡（西区）をはじめとする複数の遺跡から出土している。

弥生時代後期、新津丘陵や角田山麓に高地性集落がつくられた。新津丘陵の古津八幡山遺跡は、大規模な高地性環濠集落である。集落は丘陵上に立地し、周囲に濠をめぐらせている。このことから中国の歴史書『魏志』倭人伝に記される「倭国乱」との関わりで、戦いに備えた防御的な性格をもつ集落と考えられている。

弥生後期の土器
古津八幡山遺跡出土
左：北陸系土器
右：東北系土器



高地性集落と
古墳の分布

北の首長たち

古墳時代前期、ヤマト政権の影響力が強まり、角田山麓に山谷古墳（前方後方墳）、菖蒲塚古墳（前方後円墳）、平野部に緒立八幡神社古墳（円墳）などが造られた。越後平野は、前期古墳が分布する日本海側最北の地である。

阿賀野川をさかのぼった会津盆地にも、多くの古墳が分布している。東北地方へと勢力を拡大するヤマト政権にとって、越後平野は前進の拠点地域であった。また、越後平野は北海道の特徴をもつ土器が出土する南限であり、北方の文化も入り込んでいた。

古墳時代前期末から中期半ばにかけて、新津丘陵に古津八幡山古墳（円墳）、信濃川・阿賀野川の河口付近に形成された砂丘列上に牡丹山諏訪神社古墳（円墳）が造られた。牡丹山諏訪神社古墳では、ヤマト政権との深い結びつきを示す円筒埴輪や須恵器が出土している。

緒立八幡神社古墳の墳丘上の葺き石
（県史跡）

発掘調査中の牡丹山諏訪神社古墳

菖蒲塚古墳周辺の台地（国史跡）

北のフロンティア

古墳時代後期、ヤマト政権は地方の豪族を国造（地方官）に任命した。市域周辺では高志深江国造が任命された。高志深江国造は、日本海側最北の国造である。

大化３(647)年、ヤマト政権は北方の蝦夷支配の拠点として渟足柵を設置した。『日本書紀』に「渟足柵を造り、柵戸を置く」という記事がある。柵戸は兵士を兼ねた開拓民とされる。渟足柵の遺跡は発見されていないが、阿賀野川右岸の河口部（後の通船川河口）付近の砂丘地にあったと考えられている。

渟足柵は８世紀前半までに沼垂城の名に変わった。

『日本書紀』より渟足柵の記事

産業の勃興

地方制度が整備されたころ、須恵器や鉄の生産が始まった。新津丘陵の東側には須恵器の窯跡が、西側には鉄塊を生成する製錬遺跡が多く発掘されている。須恵器や鉄の生産は、地域の自給力を高めるために、他の地域から技術者を招くなど、国や郡の役人が主導して進めたと考えられている。

「杉人鮭」と記された木簡
的場遺跡出土
（県指定文化財）

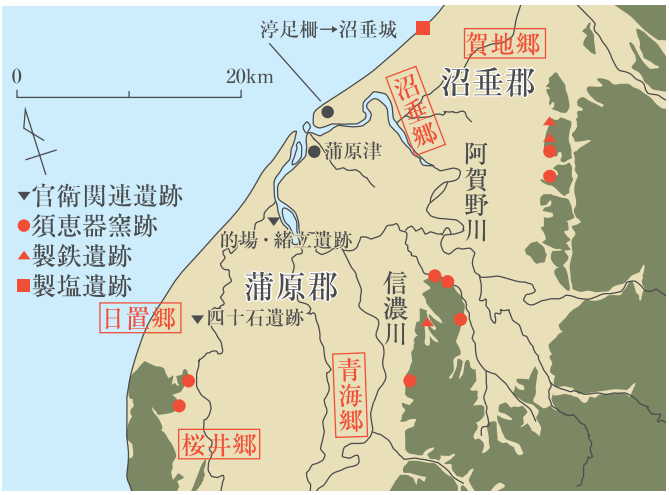
信濃川左岸の低地ではサケの漁獲・加工が行われた。サケは、税として都（朝廷）に納める越後国の特産品であった。的場遺跡（西区）からは、大量の土錘（素焼きのおもり）や木製の浮きなどの漁具のほか、役人が身に着けた革帯の飾り金具や沓（靴）、木札に文書を記した木簡、土器に文字を記した墨書土器などの官衙（役所）的な遺物が多く出土している。役人が主導して大規模な漁業が行われ、漁獲物が管理・仕分けされていたと考えられる。

的場遺跡に隣接する緒立遺跡（西区）からは、須恵器の種類・数量を示す木簡と、内水面交通を介して集まった大量の須恵器も出土している。また、海岸砂丘地帯では塩が作られた。

越後国の成立と蒲原津

７世紀末、越国が分割されて越後国ができた。奈良時代が始まる８世紀前半、国ー郡ー郷を単位とする地方制度が整った。市域は阿賀野川を境に、北が越後国沼垂郡、南が越後国蒲原郡となった。沼垂郡には沼垂郷・賀地郷など、蒲原郡には桜井郷・青海郷などがあった。

また、信濃川の河口には蒲原津があった。蒲原津は越後国の国津（公的な港）で、内水面の水路が結ばれて人や物資の集まる交通の要衝であった。諸国の貢納物（税）の輸送には陸路と海路があったが、海路の場合、越後国の貢納物は蒲原津に集められ、敦賀津（福井県）、塩津（滋賀県）、大津（滋賀県）を通って都まで運ばれた。



古代新潟市域の郡・郷と生産遺跡の分布

木炭窯（□）と製錬炉　金津丘陵製鉄遺跡群

須恵器　緒立遺跡出土

絹本著色三千仏図　中央区法光院所蔵（県指定文化財）

荘園と川湊

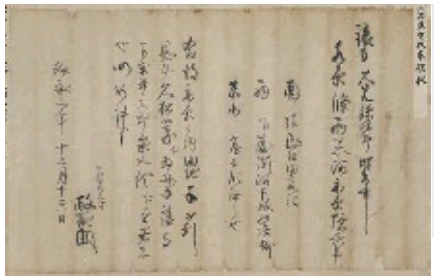
平安時代末期、古代の郡や郷の制度が解体し、当時東国において比類なき豪族と称された城氏のもと、越後の武士たちは新たな土地の開発・経営を進めていった。その結果、私領である荘園や、公領の中に「保」という行政区画が生まれた。新潟市域周辺では阿賀野川以北に豊田荘・白河荘・加地荘、新津丘陵の周辺に金津保・青海荘、弥彦山や角田山周辺に弥彦荘などの大規模な荘園や保ができた。

源平の内乱で城氏が滅亡し鎌倉幕府が成立すると、荘園の経営は、幕府から地頭に任じられて移住してきた関東の武士に代わった。彼らはさらに開発を進め在地領主となった。

市域の荘園の新しい村々は、信濃川・阿賀野川と大小の潟が造った自然堤防上に点在した。例えば水原氏が支配した白河荘飯野（北区山飯野・里飯野）は当時は阿賀野川の自然堤防上の村であった。生活資材として重要なカヤを刈る権利を示す鑑札木簡に表われる南区吉江は、信濃川支流の乱流上の自然堤防上にできた村である。これらは鎌倉時代からの生活の痕跡がうかがえる。

市域の川沿いには、鷲津（北区）、新津・古津（秋葉区）、木津（江南区）など、川湊を意味する「津」があり、人や物が集まる交通の要衝となった。蒲原津（中央区）は国の湊として公領の中に設置された。

市域周辺の荘園・保



文永2(1265)年「大見政家譲状」　飯野の地名が見える
越後文書宝翰集大見水原文書
新潟県立歴史博物館所蔵（国重要文化財）

萱刈りの鑑札
馬場屋敷遺跡出土
右：表、左：裏
（市指定文化財）

南北朝の動乱と蒲原津

建武2(1335)年、阿賀北(阿賀野川以北)の戦いを皮切りに越後における南北朝の動乱が始まった。越後の北朝方の中心は加地荘（新発田市）の加地氏、南朝方の中心は天神山城（西蒲区）の小国氏であった。蒲原津は激しい戦場となり、南朝方は蒲原津に城を築いて楯て籠り、北朝方は松崎（東区）や沼垂湊を拠点として合戦した。阿賀野川河口右岸の沼垂湊は、加地荘の領域であった。

南北朝内乱後、蒲原津は南朝方の拠点から守護上杉氏の領地となった。日本海の交易路の中間に位置する蒲原津は、再び国の湊としての役割を果たし、西国と奥州（東北）の船が行き来する越後平野で最も栄えた湊であった。

1730年以前の新潟市域の地形と交通路

蒲原津から新潟津へ

高野山清浄心院の「越後過去名簿」（過去帳・供養帳）によれば、戦国時代の永正17（1520）年に「新方」の人が供養を依頼したという記載がある。これが現在、新潟という地名が出てくる最も古い例である。新潟津は、蒲原津・沼垂湊と合わせて、当時「三ヶ津」と呼ばれた。越後の戦国大名上杉謙信は、三ヶ津に配下の代官を置いた。

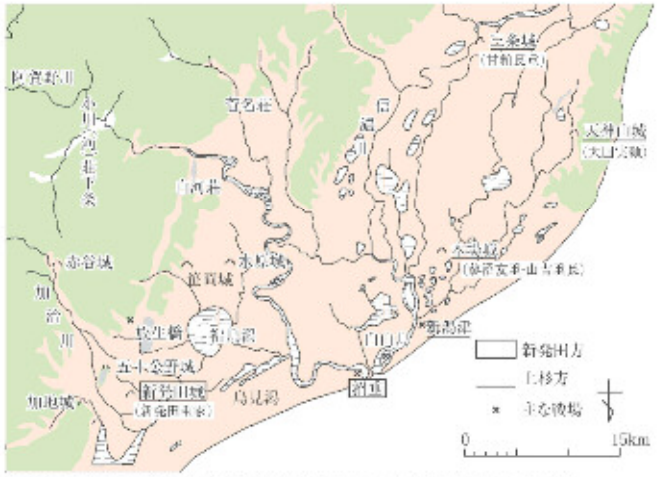
永禄7（1564）年には、京都醍醐寺の僧が「ニイカタ」の旅籠に逗留し、蒲原各地を回った。また永禄9年の仏像の墨書銘（記録）には「平島郷新潟津」とあり、平島付近（西区）にあったと考えられる。新潟津が現れると蒲原津は次第に衰え、新潟津は次第に主要な湊の役割を果たすようになっていった。

新潟津と越後統一

天正9（1581）年、阿賀北の武将、新発田重家が新潟津で入港税の押領行為を働き、上杉景勝（上杉謙信の後継者）との抗争が始まった。新発田氏は織田信長と同盟を結び、反旗を翻して上杉景勝を追い詰めた。

同10年7月新発田方は白山島（中央区）に城を築き新潟の町民を人質にとって新潟津を占拠した。それに対して上杉方は木場城（西区）を造り、「寄居」（城塞）を築いて新潟津を攻めたが、容易に攻略出来なかった。

天正14年、新発田方に味方していた新潟・沼垂の町民たちが上杉方へ寝返り、上杉方は新潟・沼垂を制圧することができた。新潟津を失った新発田氏は翌15年に滅ぼされ、越後国は上杉景勝によって統一された。



新発田重家の乱関係図（『絵図が語るみなと新潟』より転載）

祈りと生活

戦乱や災害の中で、多くの悲しみが生まれた。人々は神仏に祈り、極楽浄土への往生に救いを求めた。霊地には経典などが埋められた。西蒲区竹野町の菖蒲塚古墳経塚には、平安時代末から戦国時代にかけて、経典や鏡・仏具が埋められた。

薬師如来は衆生の病苦を救うとされた。東区松崎薬師庵に伝わる木造薬師如来坐像は、榧の一木造で平安後期の作といわれる。地蔵菩薩は六道を巡って地獄から人々を救うとされた。秋葉区小須戸の曹洞宗茂林寺に伝わる木造地蔵菩薩半跏像は、檜の寄木造で南北朝期の作といわれ、広く庶民の信仰を集めた。

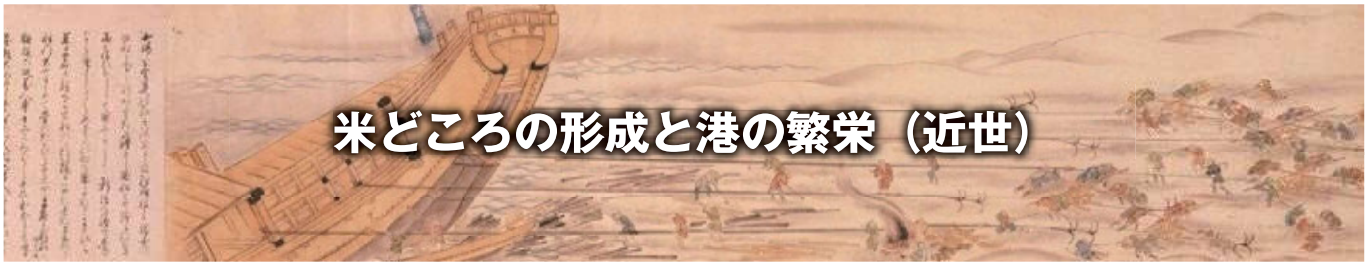
鎌倉・南北朝期には新しい仏教が浸透した。市域とその周辺には中央区烏屋野西方寺の逆ダケの薮をはじめとして、越後に配流された親鸞にまつわる多くの不思議な自然現象が伝えられている。中央区長嶺町の蒲原神社に伝わる木造伝畠山重宗夫妻坐像は、大仏師運慶の流れを汲む尾張法眼湛賀が建武元（1334）年に造立したものである。その胎内墨書銘からは、夥しい数の時宗（踊り念仏）結縁者の存在がうかがえる。

西蒲区石瀬の種月寺は、曹洞宗が最初に開いた越後四箇道場の一つで、室町時代の名僧南英謙宗に帰依する信者は他国にまで及んだ。

みなとまちの繁栄を祈る信仰の象徴もある。中央区沼垂東法光院の絹本著色不動明王二童子像は鎌倉後期の作とされ、三尊が波打つ岩上に描かれ「荒波鎮めの不動」の名で信仰を集めてきた。同じく絹本著色三千仏図は室町時代の三幅仕立で、富める有徳の信者が両親の供養として寄進したものである。

経典を収めた菖蒲塚古墳経塚出土の経筒
金仙寺所蔵（新潟市歴史博物館寄託、国重要文化財）

木造伝畠山重宗夫妻坐像　渡辺康文氏撮影
蒲原神社所蔵（県指定文化財）



米どころの形成と港の繁栄（近世）

「蜑の手振り」船囲いの様子（県指定文化財）

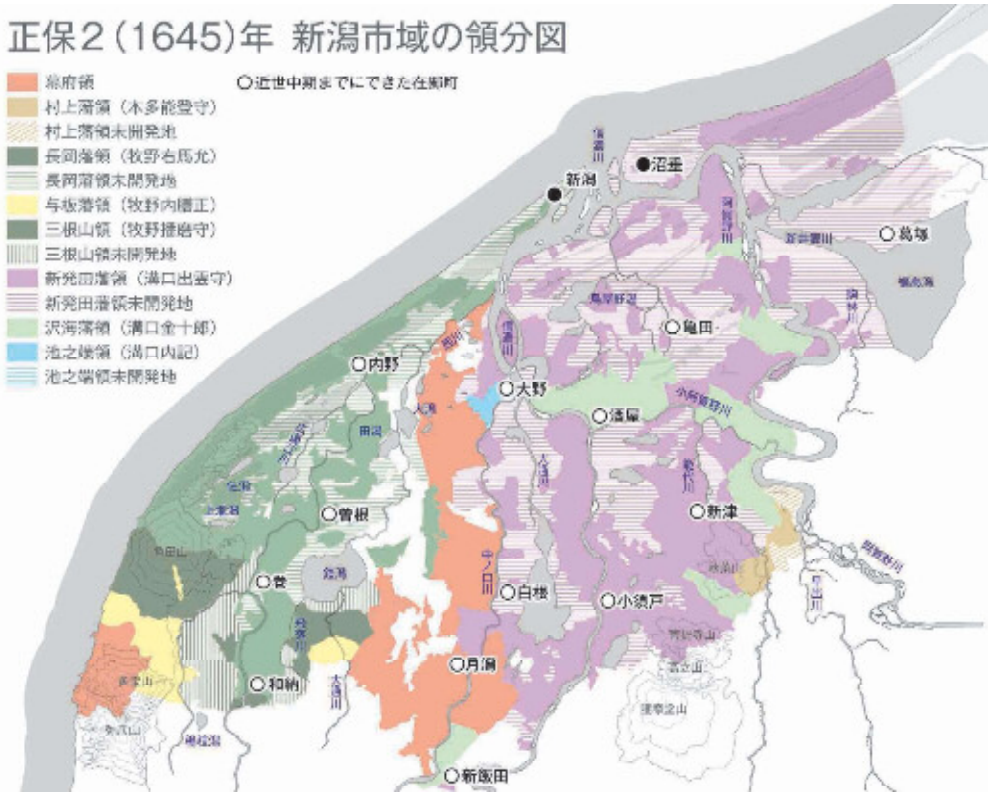
近世の幕開け

慶長3（1598）年、上杉景勝は豊臣秀吉の命令で会津（福島県）へ国替えとなり、家臣とともに越後を去った。天神山城（西蒲区）・木場城（西区）など家臣たちの城は廃城となった。越後には、秀吉の命により堀秀治が越前北ノ庄（福井市）から春日山城（上越市）へ入った。さらに秀吉は、秀治の与力大名として付けられた村上頼勝を加賀小松（石川県）から本庄（村上）城主（9万石）に、溝口秀勝を加賀大聖寺（石川県）から新発田城主（6万石）とした。

新潟市域の信濃川以西は堀領、以東は溝口領となった。同年秀吉が、翌４年に前田利家が相次いで没すると徳川家康が実権を握り、石田三成との対立が鮮明になった。

慶長5年、景勝の神刺城（会津若松市）建設を咎めた家康は上杉氏討伐を決め、越後の諸大名にも号令をかけた。景勝は越後に兵を派遣し、土豪たちを煽動して一揆を起こさせた。土豪たちは堀・溝口らに討たれ、越後における上杉氏の影響力は一掃された。

慶長15年、堀氏が改易され、家康の六男松平忠輝が、下総佐倉（千葉県）から福島城（直江津）へ入り、高田城を築いたが、元和2（1616）年に改易された。忠輝の領地は分割され、堀直寄が信濃飯山（長野県）から長岡城主（8万石）となった。翌3年、直寄は新潟町の町建てを行った。



大開発時代

信濃川・阿賀野川下流域の低地の開発は、藩の新田開発奨励などにより、近世前期に急速に進んだ。多くの村が生まれ、米の生産量は慶長３（1598）年から寛文４（1664）年の間に数倍も増加した。

開発の進展の背景には人々の移住があった。市域には「武田氏の信濃（長野県）侵攻により逃れてきた」とか「甲斐（山梨県）武田家の家臣であったが主家が滅ぼされて逃れてきた」など信濃川に沿って移住してきた人々や、「一向宗（浄土真宗）への弾圧で越前（福井県）・加賀（石川県）から逃れてきた」、「新発田の殿様に付いて加賀から来て開発した」など、北陸からの来住を伝えるものも多い。

新潟湊と沼垂湊

新潟湊は長岡藩領、沼垂湊は新発田藩領となった。信濃川・阿賀野川河口部の地形の変化に伴い、新潟は明暦元（1655）年に寄居島・白山島と呼ばれる附寄洲上の現在地に移転した。沼垂は、寛永8（1631）年の阿賀野川の洪水をきっかけに川が町を浸食したため、その後、50年の間に4度町を移転した。そして貞享元（1684）年に、信濃川右岸の現在地に落ち着いた。

越後平野の生産力が増加し、西回り海運が安定する時期までに移転を終えた新潟湊は、元禄10（1697）年には、日本国内40か国から約3,500隻の船が寄港する日本海側屈指の湊に発展していた。

地域のために命をかけた人々

正保元(1644)年、馬堀村(西蒲区)名主田辺小兵衛は馬堀用水を開削し、水不足に苦しむ村々を救った。後年、幕府から用水開削を咎められた長岡藩は、小兵衛の独断によるものであるとして彼を捕え、獄死させた。

天和元(1681)年、長岡藩領曽根組割元高橋源助が西川からの用水路を開削したが、用水路の水流を堰き止める妨害工作のために通水せず、その責めを負って源助は処刑された。その後、通水を妨げていた細工が取り除かれ、用水は通水し曽根村(西蒲区)の水不足は解消された。

宝永6(1709)年、村上藩は相続問題のため10万石の減知となった。減知分は幕府領に編入されたが、村上領に据え置かれた三条陣屋支配の4万石領8か組の村々は、宝永7年から翌正徳元(1711)年にかけて幕府領への編入を望んで嘆願を繰り返した。江戸での越訴には味方組の村々(南区・西区)からも80名余が参加したが、訴えは認められなかった。4,000名もの農民たちが参加したこの騒動は、新井白石が著した「折たく柴の記」にも記述し、幕府領における大庄屋制度廃止のきっかけとなった。

明和5(1768)年、新潟町で長岡藩が課した御用金を契機とする一揆が起きた。町民の支持を得た涌井藤四郎は町の総代として約2か月にわたり町政を執行した。藩は一揆の取調べを行い、明和7年に首謀者として涌井と岩船屋佐次兵衛を処刑した。町民は彼らを義民として密かに語り伝えた。

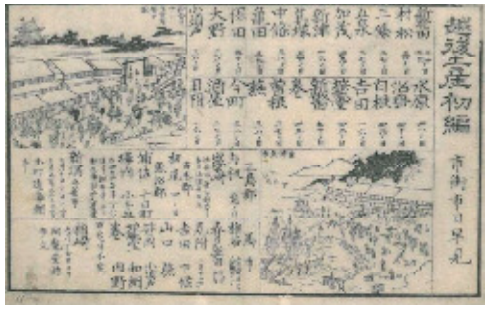
「松ケ崎悪水吐御普請絵図」の松ケ崎堀割部分

阿賀野川河口と内野新川

近世中期以降、新田開発のために砂丘内側の川や潟から海への放水路が開削された。新発田藩が享保15(1730)年に開削した松ケ崎堀割は、翌年の増水で決壊して幅が広がり、阿賀野川の新河口(現河口)になった。内野新川は長岡藩領37か村と村上藩領15か村により文政3(1820)年に通水した。西川の河床に底樋を敷設して川を立体交差させる一大土木工事で、現在も西区・西蒲区一帯の基幹排水路となっている。

在郷町と舟運

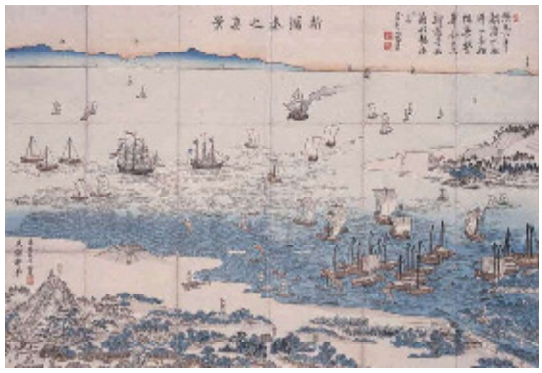
新田開発の進展と人口増加により、市域では近世中期までに葛塚(北区)、亀田・酒屋(江南区)、新津・小須戸(秋葉区)、白根・月潟・新飯田(南区)、大野(西区)、曽根・巻(西蒲区)などの在郷町が生まれた。在郷町には六斎市(定期市)が開かれた。在郷町は舟運の要所に位置しており、舟運が交通の動脈であった。



『越後土産初編』幕末には多くの市が開かれていた

新潟上知と開港五港

江戸時代後期、新潟湊では唐物(中国製品)と俵物(北海道製品)の売買が行われていた。幕府は密輸を摘発し、天保14(1843)年に新潟町を幕府領にした。初代新潟奉行の川村修就は、海岸に砲台を築いて砲術訓練を行うなど海防に努めるとともに、新潟町への飛砂防止や風俗矯正にも取り組んだ。幕府は、安政5(1858)年の修好通商条約で、開港五港の一つとして、新潟湊を日本海側における開港場としたが、各国は水深が浅い新潟湊の開港に、すぐには同意しなかった。



「新潟湊之真景」安政6年4月23日のジキット号(露)とバーリー号(蘭)の様子を描く

戊辰戦争と新潟

慶応4(1868)年、新政府軍と旧幕府側との間に戊辰戦争が起こった。新潟港は奥羽越列藩同盟側の補給基地となり、横浜などから外国商人が船で武器を運んできた。同年7月、新政府軍が太夫浜から松ケ崎浜(以上北区)にかけての海岸に上陸して、米沢藩と会津藩が守る新潟町を制圧すると、戦局は決定的となった。同年9月、慶応から明治に改元し、会津藩は降伏した。

信濃川治水と近代港湾の実現（近代）

木橋の初代萬代橋

新潟開港と近代化

新潟港は、明治元年11月19日（1869年1月1日）に開港し、同２年には、後に新潟税関となる新潟運上所が開かれた。外交上重要となった新潟町は、同３年３月に県庁所在地となったが、水深が浅く大型船が入港できず、貿易は振るわなかった。

明治５年、新潟県令に就任した楠本正隆（くすもとまさたか）は、新潟を開港場にふさわしい町にしようと、開化のための教諭文を布告（ふこく）して風俗を取り締まった。同７年には第四国立銀行（現在の第四銀行）が開業した。さらに、同16年には信濃川河畔に県会議事堂ができ、新潟は県政の舞台となった。

外国人もやってきたが、街中に雑居していた。パームは優れた医療技術で新潟の人々を驚かせた。曲馬団の一員として新潟へ来たミオラは肉屋を開き、後にレストランを開店し、新潟に西洋の味覚を伝えた。

旧新潟税関庁舎
（国重要文化財）

新潟県会旧議事堂
現、新潟県政記念館
（国重要文化財）

市町村制と新潟

新潟市は近隣町村の合併によって大きくなった自治体である。「旧高旧領取調帳」（幕末時点の村々の高帳）によれば、江戸時代の市域には580ほどの村があった。明治12（1879）年、郡区町村制で蒲原郡は５郡となり、新津町に中蒲原郡役所、巻村に西蒲原郡役所が置かれた。

新潟町は郡役所に属さない新潟区となった。同22年に市制・町村制が実施されると、新潟区に関屋地区を合併して新潟市が誕生した。現在の市域は１市（新潟市）・123町村になり、さらに明治34（1901）年の大合併で1市67町村になった（P35 近現代（明治～平成）新潟市域の合併変遷図参照）。

川蒸気から鉄道輸送へ

川の流れが緩やかな越後平野下流部では、明治期、川蒸気船が盛んに航行した。新潟を起点に信濃川・西川・中ノ口川をさかのぼって長岡・巻（西蒲区）・燕へ、栗ノ木（くりのき）川で亀田（江南区）へ、通船川から新井郷（にいごう）川に入って葛塚（北区）へ、また小阿賀野川から京ヶ瀬方面（阿賀野市）へと、路線は拡大した。しかし、夏は川の水位が下がったり、冬は川が凍結したりするなど、川蒸気船は気候の影響を受けやすかった。

明治30（1897）年、沼垂（中央区）～一ノ木戸（三条市）間の鉄道が開業し、大正期に鉄道網が広がると、交通の中心は川蒸気船や荷物運搬の川船から鉄道に移っていった。

葛塚～新潟間を運行する川蒸気船
個人蔵

大正期の新潟駅前風景

地主王国新潟

新潟市域及び周辺には、沢海（江南区）の伊藤家や白勢（しろせ）家・市島家などの「千町歩地主」を頂点に、中野家・桂家（秋葉区）など、多くの土地を集積した地主が各地に点在していた。自由民権運動から国会開設運動を指揮した山際七司（やまぎわ しちじ）も、木場（西区）の地主である。

地主は金融・商工業に投資する一方、ハサ木による米の乾燥など農業技術の改良に努めた。また、銀行や博物館の設立など、経済・文化にも大きく寄与した。

大正から昭和初期には地主と小作人の間で小作料減免を争点とする争議が多発した。和解で終結することが多かったが、地主制に大きな影響を与えた。

沢海伊藤家（北方文化博物館、国登録有形文化財）

大河津分水路

信濃川下流の根本的な洪水対策である大河津分水路の開削は、江戸時代からの懸案であった。分水工事は明治初年に実施されたものの、土木技術が未熟で中断された。しかし、明治29（1896）年に起こった新潟市域の大半を飲み込んだ「横田切れ」（燕市）「木津切れ」（江南区）と呼ばれた大水害をきっかけとして、分水工事は同42（1909）年に国営で着工され、大正11（1922）年に通水した。

これにより、分水下流の新潟市域の大洪水の危険は激減し、近代的な新潟港の築港も可能になった。

現在の大河津分水　北陸地方整備局信濃川河川事務所提供

新潟築港と萬代橋

新潟港は明治中期以降、ロシア領でサケ・マスなどを獲って加工するために、船と漁夫を送り出す国内有数の北洋漁業基地となったが、大資本が船団で操業するスタイルが始まると、拠点は北海道へ移り、新潟の北洋漁業は衰退した。

一方、信濃川の水量を調整できる大河津分水の実現は、新潟市を大きく変えた。大正３（1914）年、新潟市と沼垂町は近代埠頭の築造を期して合併した。同15年、沼垂側に埠頭が完成し内外貿易は盛り返した。港の周辺は工場地帯となり、埋め立てられた信濃川の両岸に公共施設が建てられ、新たな港湾都市に生まれ変わった。

明治19（1886）年、信濃川に長さ約782m・幅約7.3mの長大な木の橋が架かった。「よろずよまで存続するように」と願いを込めて、「萬代橋」と名付けられた。同41（1908）年の新潟大火、交通量の増加と老朽化により、萬代橋は２度架け替えられた。昭和４（1929）年に完成した現在の萬代橋は、長さ 307m・幅 22m、鉄筋コンクリート６連のアーチ橋で、耐久性に優れ、その美しさから国の重要文化財に指定され、新潟のシンボルとなっている。

築港後の新潟港　沼垂小学校所蔵

３代目萬代橋（国重要文化財）

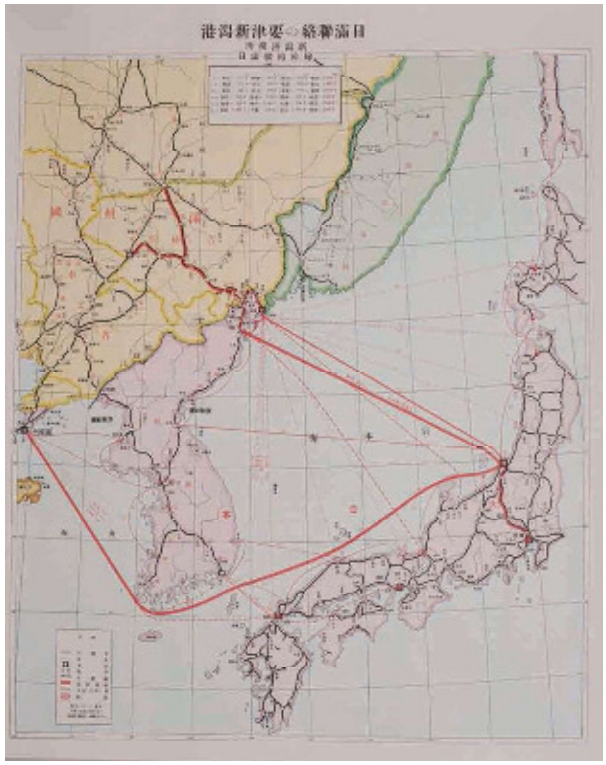
戦争と大陸への玄関、新潟

昭和６（1931）年９月１日、上越線が開通した。

同18日満州事変が勃発し、翌年には中国東北部に「満州国」が建国され、新潟は東京と満州の首都新京を結ぶ最短路の港となった。新潟と大陸を結ぶ日満航路は政府命令航路となり、満州開拓移民団は新潟港から出発していった。新潟港の貨物量は、満州との貿易と太平洋側の港湾機能の低下により、大幅に伸びた。遅れて来た港湾都市新潟の繁栄は、戦争の裏側で静かに進んでいた。

しかし、戦争が悪化すると、新潟港は機雷投下で封鎖状態になった。新潟は原子爆弾の投下目標候補地の一つであった。昭和20年８月、広島・長崎に原子爆弾が投下されると、新潟県は市民に緊急疎開を布告した。市街地は無人に近い状態で終戦を迎えた。

満州への移民団を乗せ新潟港を出港する満州丸



新潟経由が日満航路の最短ルートとなったことを示す日満航路図　昭和13年

近代

平野の乾田化と都市化の拡大（現代）

平成10年頃の新潟市中心部

占領下の新潟

昭和20（1945）年９月、アメリカ軍が新潟市に進駐し、市公会堂に軍政部を設置した。新潟飛行場は接収され、軍需工場は操業が停止された。極端な物不足のため闇市（やみいち）が出現し、農村には食糧の強制供出が割り当てられた。懸念されていた進駐軍兵士と市民とのいさかいや事件は少なく、交流することもあった。

終戦直後の新潟市本町通　新潟中央青果株式会社所蔵

自作農の創出

昭和22（1947）年に地主から農地委員会が農地を買い上げ、小作農民に売り渡す農地改革が進められた。新潟県内の改革は、同25年に終了し、自作農地は９割以上になった。地主制は消滅し、食糧増産に積極的な農民が住む、自作農家中心の村落に変わった。

舟農業からの脱却

昭和23（1948）年、東洋一と言われた栗ノ木排水機場が運転を開始し、国・県営の大排水機場が順次整備された。農家は、耕地整理組合や土地改良区を組織し、農地を統一規格に整備した。市域の農地は、同35年ごろにはほとんどが整然と区画された乾田となった。動力耕運機など農機具の導入や農業技術の改良があり、稲作生産の収量増大と安定が実現した。

栗ノ木排水機場呑口側　亀田郷土地改良区所蔵

都市の復興

電力・石油不足の中で復興を支えたのは、水溶性天然ガスであった。敗戦直後はバスや工場の燃料であったが、昭和25（1950）年ごろから尿素やメタノールを生成するガス化学工業の原料に用途が広がり、工業復興の中心となった。朝鮮戦争による特需があり、各産業が恩恵を受けたことも復興を支えた。機雷の掃海（そうかい）が完了し、同27年に安全宣言が出された新潟港の貨物量は、同31年に戦時下を超えた。

民家に残る天然ガスのタンク（中央区）　昭和 59 年

昭和の市町村合併

地方自治法が施行された昭和22（1947）年、現市域は１市48町村であった。市町村の財政強化のため、同28年から全国的に合併が進められ、同36年に3市12町村になった（P35近現代（明治～平成）新潟市域の合併変遷図参照）。

すすむ地盤沈下

昭和31（1956）年、臨港地区に浸水被害が起きた。同32年から、市内各所にゼロメートル地帯が広がり、住宅や工場、農地にも被害が出た。天然ガスの採取によって発生した地盤沈下であった。このため、柳都新潟の象徴であった西堀をはじめ、東堀、早川堀など多くの堀が埋め立てられた。

新潟の公害

昭和30～40年代、工業化の進展に伴い、大気汚染・水質汚濁・騒音などが大きな社会問題となってきた。公害の規制を求める住民運動が盛んになり、企業と新潟市は対応を迫られることになった。

阿賀野川では有機水銀中毒（新潟水俣病）が発生し、昭和60（1985）年までに690人が患者と認定された。被害者の認定をめぐり、現在でも関係機関で話し合いが続けられている。

一日市（東区）から見た阿賀野川下流域

新潟地震

昭和39（1964）年6月16日、マグニチュード7.5の新潟地震が発生した。被害は新潟市の中心部に集中し、家屋損壊・浸水・火災・液状化現象による建物の倒壊などで市民生活に大きな影響が出た。

地震後、工場の集団移転や住宅団地の郊外化が顕著となり、豊栄（とよさか）（北区）・亀田（江南区）・黒埼（くろさき）（西区）地区などとの一体化が進んだ。

倒れた川岸町の県営アパート

減反と園芸産地

昭和40年代前半、米の生産が需要を上回り、米価抑制と生産調整（減反）が始まった。

機械化による省力化や兼業農家の増加が急速に進む中で、転作奨励が行われ、各地区に園芸作物主産地が誕生する。黒埼（西区）の茶豆、南浜（北区）・大形（東区）のバレイショなど、それぞれの地区を代表する特産物ができた。

くろさき茶豆　広報課提供

新潟東港と新潟西港の開発

昭和38（1963）年、国土開発の一つとして工業港（新潟東港）の建設が着工された。東港は建設途上の同44年に開港し、その後、国家石油備蓄基地・LNG（液化天然ガス）輸入備蓄基地・国際コンテナ埠頭などが整備されて日本海側の貿易中枢港となった。

昭和40年代後半から、新潟西港の再開発も計画されたが、佐渡汽船発着場の移転をめぐり強硬な反対運動が起きた。万代島に近代的なフェリーターミナルが完成したのは同56年のことである。

東港に停泊中の LNG 大型タンカー

高速交通の結節

昭和48（1973）年、新潟空港にハバロフスク線が開設され、以後、北東アジアを中心に国際線が増えていった。同57年に上越新幹線が新潟～大宮間で開通し、新潟と首都圏は完全な日帰り圏内となった。また、同60年に関越自動車道、平成9（1997）年に北陸自動車道、磐越自動車道が全線開通し、首都圏・京阪圏への交通条件が整った。新潟市と青森市を結ぶ日本海沿岸東北自動車道も、県内部分はほぼ開通している。新潟は高速交通網の日本海側の結節点となった。

高速道路が結束する中央インターチェンジ
IC上に、日本海、新潟島、鳥屋野潟が見える　平成9年

現代

新政令市誕生記念式典　広報課提供

政令市新潟の実現

平成17（2005）年、政令市の指定を目指して新潟市と近隣13市町村は合併し、人口81万人、面積約726㎢の都市となった。同19年４月、新潟市は市域を北区･東区･中央区･江南区･秋葉区･南区･西区･西蒲区の８つの行政区とする、本州日本海側初の政令市となった。

８つの区にはそれぞれ区役所ができ、各区の特色を生かした活動も行われている。また、全市で小学校区を中心とした地域コミュニティ協議会が発足し、市民と市が協力し合ってまちづくりなどの地域課題に対する取り組みが活発に進められている。

新潟市の行政区

新潟の文化の発信

平成21（2009）年に第1回「水と土の芸術祭」が開催され、以降３年に１回、国内外の芸術家を招き作品の展示や各参加団体の活動が市内全域を会場に行われている。同27年には、東アジア文化都市の日本開催都市として新潟市が選ばれ、他の開催都市と連携した文化活動が行われた。

「ラ･フォル･ジュルネ」は、新潟市と姉妹都市になったフランスのナント市で始まった音楽祭である。新潟市では、平成22年から毎年春に新潟市民芸術文化会館（りゅーとぴあ）などを会場として開かれ、市民から親しまれている。また、西区青山海岸で毎年８月に行われる「日本海夕日コンサート」も、多くの参加者で賑わっている。

新潟市からは、有名なマンガ家が多く生まれている。平成10年から始まった「にいがたマンガ大賞」は、若手マンガ家の登竜門となっている。同23年からは、「にいがたアニメ･マンガフェスティバル（がたふぇす）」が毎年実施されている。マンガ文化の拠点として「新潟市マンガ･アニメ情報館」が同25年にオープンした。名誉館長は、「花野（はなの） 古町（こまち）」と「笹（ささ） 団五郎（だんごろう）」のキャラクターである。

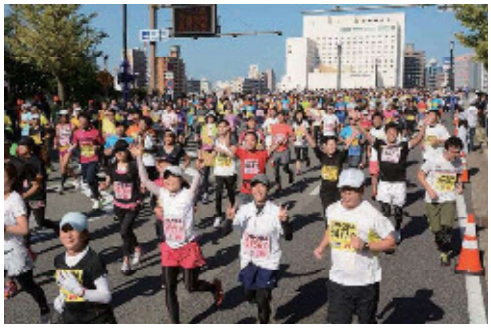
花野 古町と笹 団五郎
文化政策課提供

水と土の芸術祭　広報課提供

スポーツの振興

新潟シティマラソンは、平成10（1998）年から始められた。同23年からは、萬代橋など市街地をコースに取り入れ、多くの市民ランナーに親しまれている。さらに、サッカーＪ1チームをはじめ、新潟市を拠点とするプロスポーツチームも多くできており、市内外のサポーターの応援で、各試合は賑わっている。

平成21年に新潟県で「第64回国民体育大会（トキめき新潟国体）」と「第９回全国障害者スポーツ大会（トキめき新潟大会）」が開催された。新潟市内は陸上競技やホッケーなど多くの会場となり、全国の選手や応援の人たちを受け入れた。政令市になり、各区でのスポーツ施設の充実が図られている。同26年には日本海側では唯一の通年型のアイスアリーナが完成した。


新潟シティマラソン　スポーツ振興課提供

東日本大震災と新潟の支援

平成16（2004）年の新潟県中越地震、同19年の新潟県中越沖地震、同23年に起きた東日本大震災において、新潟市は各被災地に対して多くの支援を行ってきた。

特に東日本大震災に際しては、同じ政令市の仙台市に対して、のべ8,380人の職員を派遣するなど、物心両面の支援を行うとともに、被災地に対する日本最大級の救援センターとして、大きな役割を果たした。また、多数の避難者を受け入れ、避難所を開設し支援を行った。避難者の数は、最大3,912人に及んだ。

災害に強いまちづくりに取り組むとともに、今後想定される太平洋側の大災害発生時の日本海側の拠点として、新潟市が果たす役割はますます大きくなっている。

津波の被災地（石巻市）で救助活動を行う市消防局職員　消防局提供

食育と花育の推進

新潟市の水田耕地面積は、市町村別全国第1位である。農業産出額も全国トップクラスとなっている。平成23（2011）年には、ＡＰＥＣ食料安全保障担当大臣会合が、新潟市で開催されるなど、その存在感を高めている。

平成26年に「いくとぴあ食花」（中央区）がグランドオープンした。同年、日本初の公立教育ファーム「アグリパーク」（南区）もでき、多くの小中学生や市民が利用して農業にふれ、新潟の食を学んでいる。

新潟市は、平成26年に「大規模農業の改革拠点」として国家戦略特別区域の指定を受け、各事業者との連携による農業の推進が図られている。ほかにも「にいがた食の陣」が毎年開催されていて、新潟の食文化の豊かさを全国に発信している。

いくとぴあ食花　食育花育センター
食育花育センター提供

市の歴史施設の充実

政令市となり、新潟市の歴史を学ぶ施設の充実が図られてきた。平成16（2004）年には、「新潟市歴史博物館（みなとぴあ）」（中央区）がオープンした。館内をめぐることによって、新潟市の歴史を概観することができる。同23年には、「新潟市文化財センター（まいぶんポート）」（西区）が整備され、旧石器や縄文土器など市内で発掘された文化財が展示されている。同27年には、史跡古津八幡山遺跡の円墳（秋葉区）の復元整備が終了して全面オープンし、「弥生の丘展示館」と共に公開されている。

市内各区には、「旧小澤家住宅」や「旧齋藤家別邸」（中央区）や「旧笹川家住宅」（南区）などかつての豪商、豪農の生活と文化に触れることのできる歴史施設が多数ある。また、「新潟市新津鉄道資料館」（秋葉区）は、蒸気機関車や新幹線などの実物車両の展示や、鉄道の運行現場で実際に使われた品々の展示から鉄道の歴史を学ぶことができる。

新潟市歴史博物館　みなとぴあ

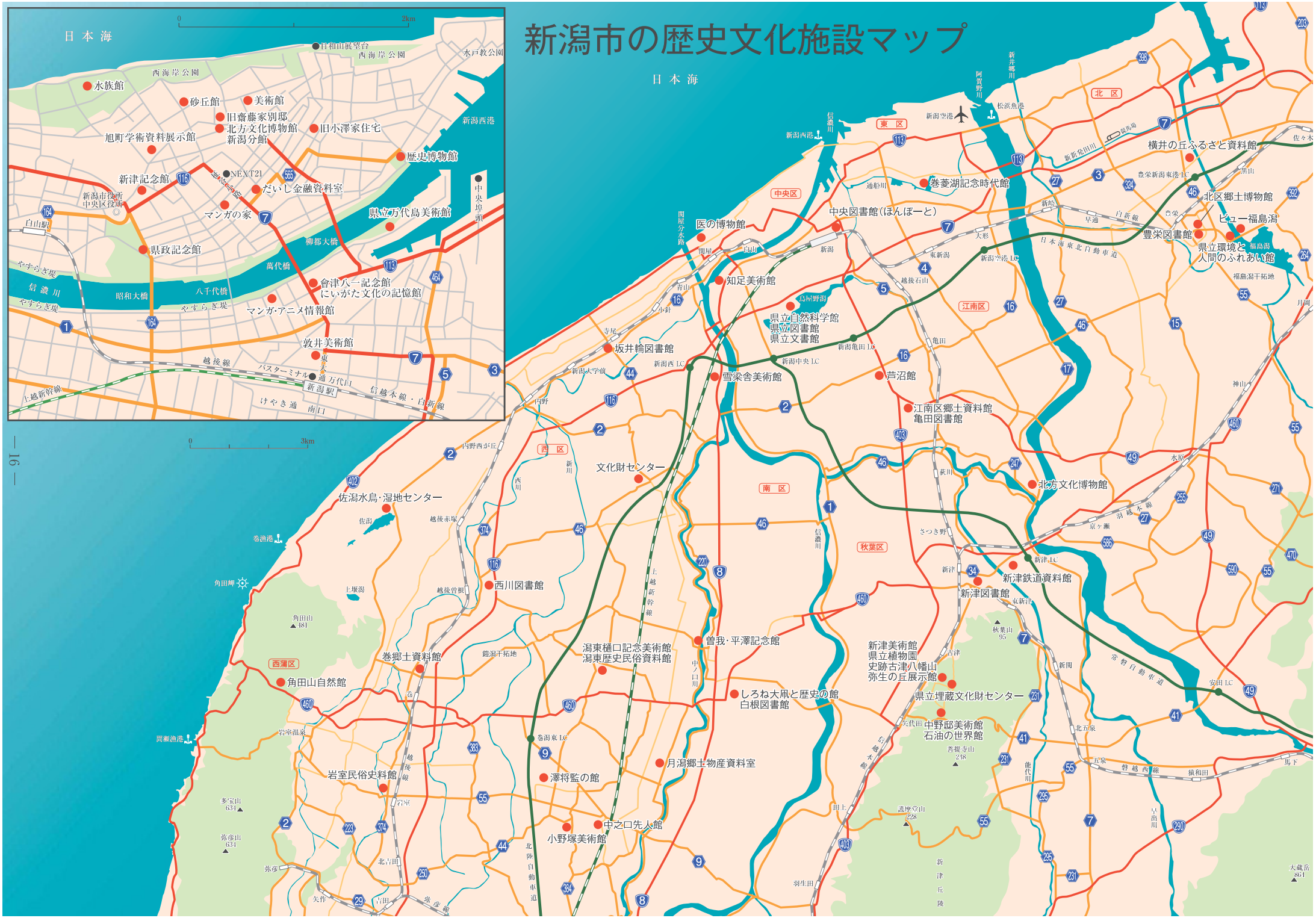
政令市新潟のこれから

新潟市が政令市となって10年が経過した。これまで新潟市は、「地域」、「大地」、「世界」の力をまちづくりに活かし、市民一人ひとりの安心を共に育ててきた。

政令市として第２ステージを迎え、「安心政令市にいがた」の実現に向け、市民と地域が学び高め合う安心協働都市、田園と都市が織りなす環境健康都市、日本海拠点の活力を世界とつなぐ創造交流都市という３つの都市像を掲げ、各種の取り組みが進められている。

新潟市街全景　広報課提供

新潟市の歴史文化施設マップ



新潟市各区の歴史

（北区・東区・中央区・江南区 秋葉区・南区・西区・西蒲区）

阿賀北の豊かな自然とともに　ー北区の歴史ー

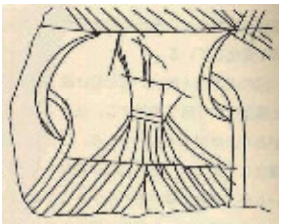
水の駅「ビューー福島潟」と菜の花畑　北区地域課提供

北区の古代遺跡

古墳時代前期（4世紀）の遺跡である葛塚遺跡（葛塚）から、人物が線刻で描かれた朱塗りの土師器の壺が出土した。人物は、裳を着て鳥に仮装した巫女と考えられている。裳が土器に描かれたものとしては日本最古の可能性があり、古墳時代の人々の服装を考える上で、貴重な資料となっている。

また、新潟東港中央水路の開削工事中に発見された出山遺跡（太郎代）は、奈良時代の製塩遺跡である。出土した土器は鼓型の器台とコップ状の土器がセットになった形状が特徴的であり、「出山式製塩土器」と呼ばれている。出山遺跡では毎年、薪と製塩土器、作業従事者が送り込まれ、専業的に製塩作業を行っていたと考えられる。

「葛塚遺跡出土朱塗り線刻人物画土器」（市指定文化財）



左写真の復元図（『葛塚遺跡』より転載）

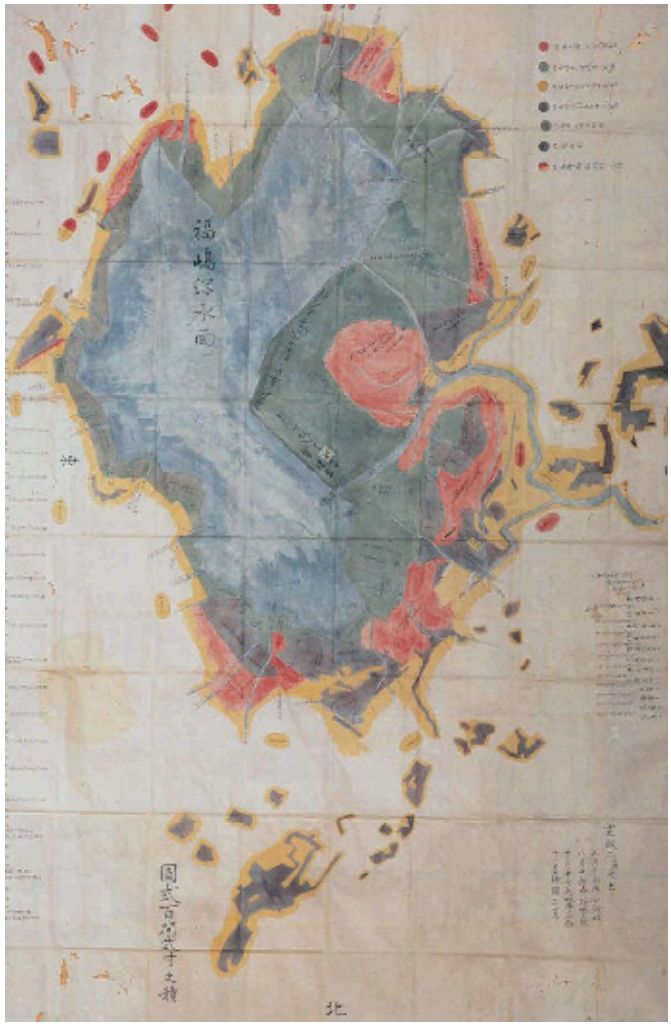
福島潟の開発

福島潟は貞享年間（1684～88）には水面が約 5,800 町歩（約 5,800ha）であったという記録（山本丈右衛門の開発願書）があるが、これは現在の福島潟の約 30 倍の広さであった。

福島潟の開発が進んだのは、宝暦５（1755）年に幕府が開発を頸城郡鉢崎村（柏崎市）の山本丈右衛門に許可してからである。丈右衛門は、潟に流れ込む水量を減らすため加治川や新発田川の改修、新太田川の掘削などを行い、89町歩を開発した。

寛政２（1790）年には、幕府の許可を得た水原（阿賀野市）の市島徳次郎をはじめとする13人衆が開発を受け継ぐ。13人衆は開発場所を土手で囲んで水を抜いて水田化する「箱開墾」や、潟の全面開発を目指して潟の中に３本の堤防を作る分割開発法などにより、452町歩を開発した。さらに文政６（1823）年、潟周辺は新発田藩の預地となり、藩は452町歩を開発したが、安政２（1855）年には潟を豪農15人に譲渡し、潟の全面開拓を放棄することとなった。その後福島潟は、明治44（1911）年には、千町歩地主といわれた天王（新発田市）の市島家の所有となる。

昭和31（1956）年、国は潟を市島家から買収し、同36年の新井郷川排水機場の完成を契機に、同43年から国営干拓を開始した。約23億円の費用をかけ、北側の湿地帯193haを遊水池として残し、169haの農地を生み出し、同50年に完工した。現在の福島潟は、オオヒシクイ（国の天然記念物）やオニバスなど多数の鳥類や植物が確認され、国際的にも注目されている自然の宝庫となっている。



「寛政二庚戌年　福島潟絵図」　北区郷土博物館寄託（市指定文化財）

北区出身の幕末の志士たち

慶応4（1868）年に北越戊辰戦争が始まり、7月に新政府軍が太夫浜・松ケ崎浜に上陸すると、新発田藩は新政府軍に呼応した。勤皇の志を持つ庄屋層は、新政府軍に味方する「草莽勤王隊」を各地で自発的に結成した。

下興野新田（葛塚）庄屋の遠藤七郎によって組織された北辰隊は、新発田藩の指揮下に入らずに長州藩干城隊に属し、角石原（新発田市）では先鋒隊として会津軍と戦った。隊員は、出身地の明らかな152名のうち、葛塚周辺の農民が過半数を占めていた。

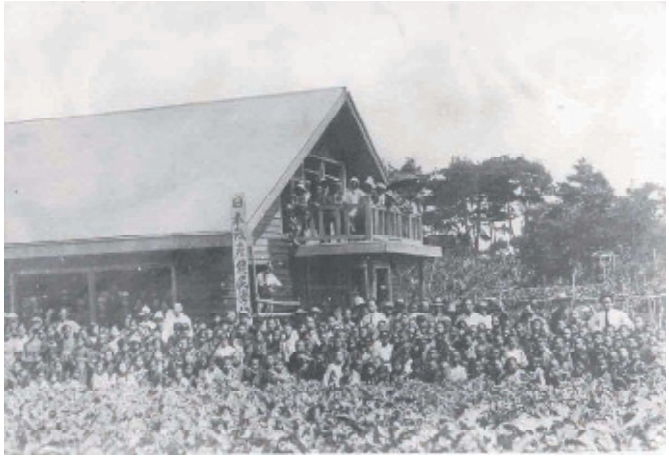
一方、新発田藩に属した岡方組正気隊は、岡方組庄屋曽我士郎（長左衛門）を隊長として組織され、隊員は41名であった。岡方組正気隊は、同じく新発田藩内で結成された新発田組正気隊・五十公野組正気隊とともに、米沢・会津方面に従軍し、警備や物資の輸送にあたった。

北辰隊関係資料　北区郷土博物館所蔵（市指定文化財）

木崎村小作争議

地主王国であった新潟県では、大正末期から各地で地主・小作間の争議が激増したが、なかでも北蒲原郡は争議の発生件数の多い地域であった。

小作農家が多かった木崎村では、大正11（1922）年11月23日に木崎村笠柳・横井小作組合が結成されて地主への小作料2割減免要求を決定し、全国的に有名な木崎村小作争議が始まった。大半の地主は小作側の要求を認めたが、一部の強硬派地主は小作料請求訴訟を起こした。小作側は、法廷闘争を進めるため日本農民組合関東同盟に加盟した。



木崎村日本無産農民学校　新潟県立文書館所蔵

大正15年、争議は最も激化し、5月には耕地への立ち入り禁止処分をめぐって警官隊と小作人が衝突した鳥屋浦事件が起こった。また、このころから小作側は組合員子弟を同盟休校させ、笠柳の高台には無産農民学校の校舎が建設された。一方、婦人部が結成され、行商による宣伝や、上京して関係者に実情を訴えるなどの活動が行われ、彼女たちの姿は大々的に新聞に報じられることとなった。

同年7月25日、無産農民学校上棟式が行われた日の夜、松ケ崎の講演会場に向かって行進中の小作人たちが、久平橋で警官隊と衝突し乱闘となった。この久平橋事件により組合側の幹部の多くが拘束され、小作争議の運動は急速に弱まっていった。

昭和5（1930）年、地主と小作人の和解が成立し、小作側が未納小作料の全額を償還することで、争議は終了することとなった。

新潟東港と新潟競馬場

新潟東港と新潟競馬場の建設は、高度経済成長期の旧豊栄地域における2大プロジェクトであった。昭和44（1969）年に開港した新潟東港は、日本海側唯一の「中核国際港湾」に位置付けられている。東港周辺は大規模な臨海工業地帯として発展を遂げ、ＬＮＧなど年間１千万ｔ以上を受け入れる日本海側最大のエネルギー基地となっている。

また日本海側で唯一、日本中央競馬会（JRA）が主催する中央競馬が開催される新潟競馬場は、関屋地区（中央区信濃町・文京町）にあった旧新潟競馬場の関屋分水路工事に伴う移転によって建設され、昭和 40 年７月、初めてのレースが開催された。休日には県内外から多くの人々が訪れ、北区を代表するレジャースポットのひとつとなっている。

新潟東港　平成９年

二大河川（信濃川・阿賀野川）が作りだした東区のあゆみ　―東区の歴史―

東区の工場群

古代を紐解く

大化の改新後の大化３（647）年、ヤマト政権は北方の蝦夷（えみし）支配の拠点として「渟足柵（ぬたりのき）」を造った。『日本書記』には、「渟足柵」と記された記事が残る。その場所や構造、役割などは不明なことも多いが、通船川右岸の王瀬（おうせ）、河渡（こうど）周辺に存在したとする説が有力視されている。

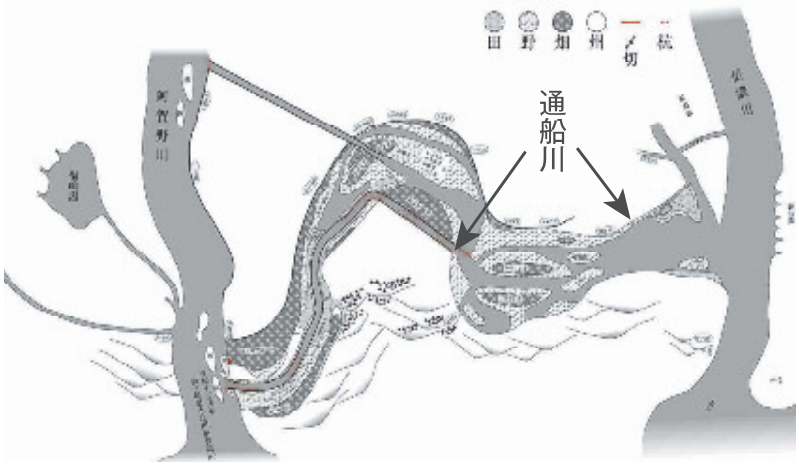
平成26（2014）年9月、牡丹山諏訪神社（ぼたんやますわ）で須恵器（すえき）の破片などが発見された。5世紀前半に造られた直径約30～36mの円墳であることがわかり、円筒埴輪（えんとうはにわ）の破片が約200個見つかった。この古墳はヤマト政権と密接な関係がある有力者の存在を示すものと考えられており、７世紀に造られた「渟足柵」とのつながりにも興味・関心が集まっている。これらは古代新潟の歴史、東区の歴史を紐解く発見となった。

牡丹山諏訪神社古墳の発掘　平成 26 年

河川と東区のかかわり

東区の生い立ちには、区内を流れている河川の歴史が大きく関わっている。

寛永年間（1624～1644）ころ、阿賀野川は現在の通船川付近を通って信濃川に合流していたが、享保 15（1730）年、堰を超える阿賀野川の増水分を直接日本海へ放出するために、現在の松浜地区に掘割を掘った。ところが、翌年の洪水でその堰や掘割が決壊し、日本海へ流れ込む本流となったため、現在の阿賀野川の姿になった。その後、信濃川と阿賀野川本流を結ぶ旧阿賀野川河道が干上がったため、両河川間の通船の便を向上させるために旧河道の一部を掘り直したのが通船川である。干上がった川の跡は、新たな耕地となって農業生産を高めた。



「古阿賀野川出州図写」トレース図（一部加筆）　安永2（1773）年

「松ヶ崎悪水吐目論見候節村々相記し候絵図」（一部加筆）享保14年 個人蔵

栗ノ木川は、亀田郷内の排水路としての役目のほか、多数の貨客船が往来し賑（にぎ）わいをみせていたが、舟運の衰退、自動車交通の発達とともに埋め立てが決まった。昭和 43（1968）年10月に埋め立て地を6車線道路にする工事が着手され、同50年に全線が開通した。

工業地帯としての伸展と衰退

明治時代後期に新潟鉄工所が山ノ下地区に工場を建設し、大正時代にかけて、石油採掘用機械・工作機械や車両の製造にあたった。昭和6(1931)年に、全国的にも珍しい民間会社経営の臨港埠頭(ふとう)が完成した。信越線と埠頭を結ぶ臨港鉄道とともに輸送機関が整備されたことにより、工業地帯の伸展を支える重要な基盤となった。周辺には中小の関連工場も設立され、多数の労働者を抱える工業の町として発展した。同38(1963)年に臨港埠頭付近に火力発電所が完成し、新潟市の工業発展の中心となった。

昭和30年代に入り、工業の発展とともに、臨港埠頭付近の地盤沈下や山ノ下周辺の大気汚染、河川の水質汚濁が進み、公害と判定されたものもあった。昭和40年代ころから、工場の撤退、縮小の動きが出てきた。その工場跡地の多くは、現在、住宅地や団地に生まれ変わっている。

山ノ下地区の工業地帯　昭和30年代

新潟地震での大きな被害

迫りくる黒煙、重油、汚水に無人となった町

昭和39(1964)年6月16日、午後1時1分に発生した新潟地震における山ノ下地区の被害は甚大であった。石油タンクの炎上と住宅への延焼、ゼロメートル地帯への津波の浸水により、この地区では、多くの人々が長期間にわたり困難な避難生活を強いられた。

山の下中学校区の3つの小・中学校では、火災や浸水等により、家屋損壊の被害を受けた児童が8割を超えた学校があった。避難させた子供たちを保護者に届けるまで、3日2晩守り続けた教師のことが、50年以上も語り継がれている学校がある。しかしながら、地震前の生活を取り戻すことができず、郊外へ移転した家庭や、一時的に他の学校へ転校した児童・生徒も少なくなかった。

交通の要所として

山ノ下埠頭は、新潟西港の再開発計画により、昭和61年度に拡張・整備された。新潟と敦賀、小樽を結ぶ大型カーフェリーの定期航路の発着場としての利用のほか、外国船も入港している。

昭和5(1930)年に市営飛行場としてスタートした新潟空港は同33(1958)年にアメリカ軍から返還されたのち、新潟～東京間に定期空路が開設され、本格的に旅客輸送が開始された。平成27(2015)年現在、国際線3路線・国内線8路線を擁し、年間100万人近い乗降客が利用している。交通の要となる施設などの整備、拡充により、国内外との人的、物的交流が進み、さらに発展が期待される東区である。

空の玄関口　新潟空港

日本一の大河・信濃川の河口　広報課提供

堀直寄による町建て

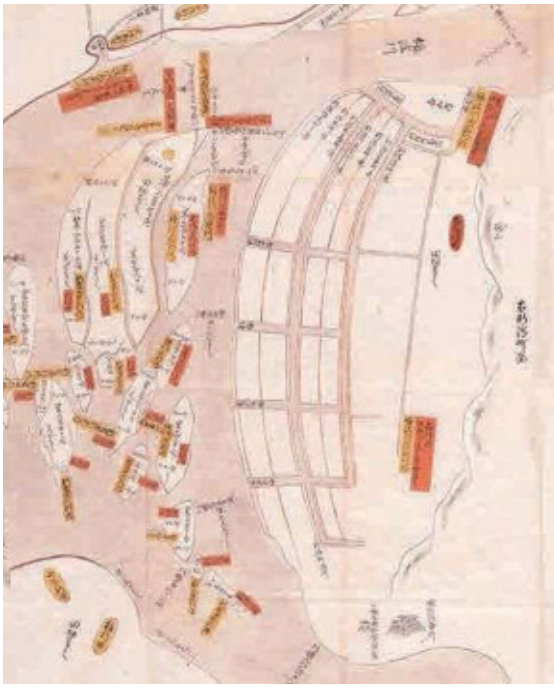
信濃川の河口にあった新潟湊（みなと）は、江戸時代の初めに長岡藩領になった。長岡藩にとって新潟湊は大切な港で、年貢米の積み出しや、藩内で生産された産物の運び出しに欠かせない場所だった。元和（げんな）３（1617）年、長岡藩主の堀直寄（なおより）は、新潟町に新たな町並みを作るように命じ、町の拡大を図った。このときの新潟町は現在の東中通よりも海岸寄りの地にあった。新潟町は湊あっての町だったので、川の流れが変わり、回船が町の近くまで入船できなくなったり、町が浸食されたりして湊町の役割を果たすことができなくなると、町の場所を変えた。

新潟町の明暦移転

寛永15（1638）年、長岡藩は新潟町を寄居・白山島へ移転することを幕府に申請した。阿賀野川が信濃川と合流し、湊が浅くなって使えなくなったためである。幕府の正式な許可を受け、明暦元（1655）年に移転した。このときに移転した場所が現在の新潟市の中心部にあたる。

当時の町並みは、上（かみ）（南）が白山神社境内地、下（しも）（北）が洲崎（すざき）町（古町通13番町）まで、東西は現在の上大川前通から西堀通までの間だった。寺町（西堀通）は最初から寺々が建ち並ぶ町として計画され、寺町の中央部に奉行所が置かれた。信濃川と並行して南北に片原堀（東堀）と寺町堀（西堀）、東西に白山堀（一番堀）・新津屋小路（にいつやこうじ）堀・広小路堀・御祭（ごさい）堀が掘られた。後に新（しん）堀が掘られて信濃川から入る堀は５本になった。これらの堀を利用して物資が運ばれた。

信濃川には中洲が数多く生まれ、これらが新潟町に寄り付いて安定した土地になり、町は拡大していった。



「蒲原新潟立会小絵図」元禄11（1698）年

新潟町の湊祭

江戸時代中期以降、新潟の町中が湧き立つ祭には、春と夏の白山祭、七夕の湊祭（みなとまつり）があった。最も盛り上がるのは、7日間にわたる湊祭だった。

町は一番組から二十二番組までの組に分かれ、各組がそれぞれ山車（だし）や纏（まとい）を中心に出し物を持って祭りに参加した。住吉の神輿（みこし）が一番組の引く御座船（ござぶね）に乗せられて町を巡った。日中の昼祭りは一番組から八番組、夕暮れから始まる夜祭りは九番組から二十二番組が神輿に従った。

湊祭は、新潟町が幕府領になってからはますます派手になり、新潟奉行が出し物の飾りを制限するほどだった。湊祭は現在、新潟まつりの住吉行列に名残をとどめている。

「蜑の手振り」新潟湊祭の行列　嘉永５(1852)年（県指定文化財）

新潟開港と街の開化

明治元年11月（西暦1869年1月）に新潟港が開港したことで、外交上重要となった新潟町は、同3年に県庁所在地となった。

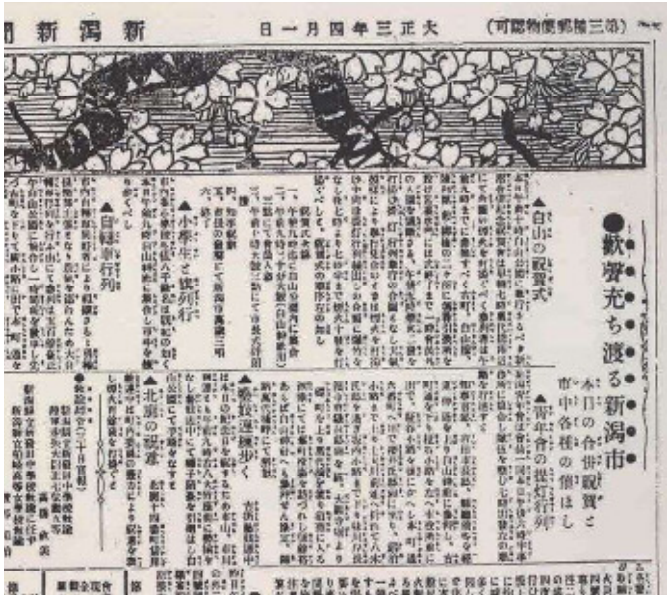
明治５（1872）年に新潟県令として赴任した楠本正隆（くすもとまさたか）は、新潟町を開港場にふさわしい町並みにしようとした。

堀をきれいにし、道路の整備を行い、街灯を建て、防火用水桶や排水溝を設けたり、庇（ひさし）の高さをそろえたりした。さらに、片原堀を東堀、寺町堀を西堀としたり、上（白山神社側）から順に本町通一番町、二番町のように通し番号としたりするなど、地名と町名を改めた。このとき、現在の町名がほぼ定まった。

また、白山神社の境内にあった蔵や小さな社を撤去し、新潟遊園（現在の白山公園）を造った。以前からあった蓮池を生かして、築山を盛り、花壇や樹木・庭石を配置した庭園であった。新潟遊園は、明治６年に日本最初の公園の一つとして開園し、新潟町の新名所になった。

町並みの整備が進む明治初年の古町通一・二番町

新潟・沼垂の合併と新潟築港



新潟と沼垂の合併を伝える「新潟新聞」大正３年４月1日付（部分）

江戸時代の湊をめぐる度重なる訴訟以来、新潟と沼垂（ぬったり）は長く対立が続いていた。

明治41（1908）年２月に沼垂町で大火があったときに、新潟市の消防ポンプが活躍した。このことがきっかけとなって、合併に向けた動きが始まった。県知事も合併を促し、積極的関与の下で合併準備が進んだ。大正3（1914）年1月、県知事の合併諮問案が新潟市会と沼垂町会で審議され、それぞれ満場一致で合併を受け入れることになった。

合併当日の4月1日は、白山公園で祝賀会が開催され、仮装自転車行列や小学生の旗行列があり、夜には新潟青年会と沼垂青年協会による提灯（ちょうちん）行列が行われた。

合併を機に竜ケ島地先への新港の建設計画が始まった。大正６年に着工し、同15年３月、近代埠頭となる新潟築港（ちっこう）が完成した。新潟港ができたことで、大型貨物船の入港が可能になり、取扱貨物量も増大した。

関屋分水路

関屋分水路は、新潟港の機能強化と海岸決壊の対策として計画されたが、昭和40（1965）年、信濃川が一級河川になり、治水目的の国の事業として施工された。同42年12月、海への出口の可動堰（せき）である新潟大堰の工事が始まり、同47年に通水した。その後、信濃川水門と締切堤が建設され、同56年3月に事業は終了した。

工事に伴い、移転対象となった家屋の多くは、宅地造成が行われた関屋競馬場跡地に移転し、新しく信濃町と文京町ができた。また、掘削工事で約350万㎥の土砂が排出されたが、新潟バイパスや亀田バイパスの盛り土、栗ノ木川の埋め立てなどの公共工事に利用された。

関屋分水路が完成したことにより、信濃川下流の左岸地域は「島」の形態となり、いわゆる「新潟島」ができた。

掘削がほぼ完了した関屋分水路　昭和46年６月
北陸地方整備局信濃川下流河川事務所提供

水とたたかい、育んだ江南の地　―江南区の歴史―

北方文化博物館の藤棚　北方文化博物館提供

砂丘に残る祖先の足跡

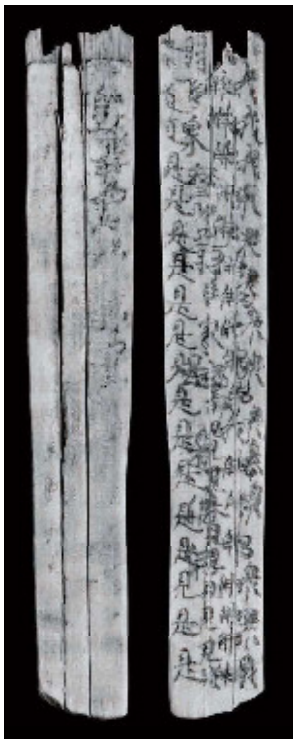
江南区は、平野部で最も古い砂丘列とその周りに広がる低湿地が大部分を占める地域である。

縄文時代、この地域の砂丘の周囲には水面が広がっていた。砂丘上にある笹山前遺跡（蔵岡・笹山）では縄文前期（約6,000年前）の深鉢形土器のほか、縄文晩期（約2,500年前）の小形の壺形土器が出土している。壺形土器は赤色顔料のベンガラが入った状態で出土し、貯蔵用あるいは携帯用の容器として使われていたと考えられる。

砂丘列の成長が、信濃川、阿賀野川の排水を阻むようになると、砂丘の周囲は湿地へと変化した。西郷遺跡（茅野山）からは、炭化した米が出土しており、すでに弥生時代中期（約2,000年前）には、稲作が行われていたことが分かる。

江南区域は信濃川・阿賀野川に挟まれた地域で、潟（せき）湖（こ）も点在していたことから、内水面交通が発達した。平安時代前期の駒首潟（こまくびがた）遺跡（亀田早通）からは、越前国（福井県）の豪族「足羽臣（あすわのおみ）」の名が記された木簡が出土している。

ベンガラの入った壺形土器
笹山前遺跡出土



習書木簡　駒首潟遺跡出土
三行目に「足羽臣」と見える。

新田の開発により生まれた村々

江戸時代、江南区の多くは新発田藩領となった。横越（よこごし）は、蒲原横越組の大庄屋（おおじょうや）小林家・建部家の所在地として、横越島の100を越える村をまとめる政治の中心地となった。沢海（そうみ）には、沢海藩が一時期置かれた。

江戸時代以前から横越島では河川の自然堤防や砂丘の微高地に村が形成されてきた。その後、「草分（くさわけ）」と呼ばれる有力農民等による低湿地の新田開発が進められた結果、中谷内（なかやち）（亀田）や丸潟、鵜ノ子（うのこ）など、今日に続く多くの村々が成立し、亀田郷では寛永年間（1624～44）の末までに50か村にもなった。各村々の耕地も拡大し米の生産高も飛躍的に増加し、鍋潟新田では元禄13（1700）年と天保５（1834）年を比べると、約10倍にもなっている。

寛永16（1639）年「横越島絵図」個人蔵（市指定文化財）

舟運を使った市場と商品作物の広がり

「亀田八景」には江戸時代の亀田の代表的な風景が描かれている。描かれた場面のひとつに「乗落の帰帆」がある。「乗落」は船着き場があったところの名で、新潟や沼垂と亀田を往復する船で栗ノ木川の船着き場が賑わう様子を伝えている。縦横に走る河川や堀、鳥屋野潟等の湖沼を利用した舟運によって、亀田や酒屋は在郷町となった。両地域では現在も六斎市が開催されている。

江戸時代半ばから沢海でタバコ、二本木・両川・亀田でナシや梅（藤五郎梅）などの商品作物が栽培され、綿織物（亀田縞）の生産も始められた。亀田縞は農作業着として重宝された。ナシと梅は、現在も特産品として栽培されている。

大倉南岱画　梅田順亭讃
「亀田八景」乗落の帰帆
弘化4（1847）年　個人蔵

水とたたかった人々の営み

信濃川、阿賀野川等に囲まれた低湿地であるこの地域は、大正２（1913）年の木津切れ、同６年の曽川切れに代表される水害の多い地域であった。また、田んぼに溜まった雪解け水や雨は容易には引かなかった。農民は水に浸かり、田舟を使って稲作に取り組んだほか、小規模排水機の設置や、河川の改修なども行った。冬季には農家の貴重なタンパク源である魚介を獲り、ドジョウを首都圏に出荷していた。

沢海の伊藤家は江戸時代の後期から土地を集積しはじめ、多くの小作人を抱え、大正13年には所有耕地1,346町歩を誇る県内でも有数の大地主として成長した。明治40年代からは米の品評会を開催したり、農事講習会を開いたりして、小作人たちが優良な米を作ろうとする環境を形成した。現在、その家屋敷は「豪農の館・北方文化博物館」として、往時の繁栄を紹介する観光スポットとなっている。

木津切れで避難する亀田上町の人々　江南区郷土資料館所蔵

深田での稲刈り後、田舟で運搬する農民
昭和 23（1948）年頃　本間喜八氏撮影　亀田郷土地改良区所蔵

「地図にない湖」を美田にした土地改良

昭和 23（1948）年、人々の悲願であった国策による栗ノ木排水機場が完成し、亀田郷 6,000ha の大半で大規模な土地改良事業が進められた。農地改革による小作農の自作農化とあいまって、農民は耕地整理組合や土地改良区をつくり、農地の区画整理などに努めた。佐野藤三郎を中心とした亀田郷土地改良区の先進的な取り組みは、国内外で高く評価された。その結果、「芦沼」や「地図にない湖」と呼ばれた亀田郷は、豊かな美田へと変貌した。

その後、新潟地震の災害復旧事業の一環として親松排水機場が設置され、亀田郷は完全に乾田化した。

耕地整理作業中の人々
本間喜八氏撮影　亀田郷土地改良区所蔵

交通の利便性を生かす地域の変貌

昭和40年代に入ると、市中心部の更なる都市化に伴って急激に人口が増加し、農地は宅地へと変化した。交通量も増大し、昭和49（1974）年には亀田バイパスが全線開通した。また、インターチェンジや亀田駅の近くなどには複数の工業団地が造成され、多くの企業が誘致された。

その後も、昭和63年には北陸自動車道が、平成６（1994）年には磐越自動車道が開通するなど、高速交通網が整備され、大型商業施設が進出し、広域からの集客力を強めている。平成の大合併により、さらに大きな変貌を遂げている。

亀田バイパス沿いの排水路と左に見える工業団地

大地と里山とともにのびゆく郷土　―秋葉区の歴史―

古津八幡山遺跡（国史跡）

行き交う古代の人々

新津丘陵北西部に位置する古津八幡山遺跡は、弥生時代後期の大規模な高地性環濠集落で、断続的につらなる二重の濠をめぐらし外敵に備えていた。遺跡から出土した弥生土器には３つの系統がある。縄文とヘラで描いた文様をもつ東北系、薄板で土器の表面をなでて刷毛目をつける北陸系、東北系の器の形でありながら、縄文文様はなく刷毛目がついた在地系の３つである。３系統の土器がほぼ同じ割合で含まれていることは、この地が日本海や阿賀野川を介して、北陸地方や東北・会津地方と交流を行っていたことを物語っている。

古津八幡山の高地性環濠集落は、弥生時代終末期に途絶えるが、約150年後の４世紀後半から５世紀初めころに、古津八幡山古墳が築かれる。直径60mの県内最大の円墳で２段に築かれている。墳丘部分の築成には、古墳の周縁に沿って土手状の盛土をして土手の中へ土を盛る西日本的工法と、中央に小丘を作って周囲へ土を盛っていく東日本的工法の折衷方式が用いられていることから、東西の土木工法を知る畿内の技術者がかかわった可能性がある。

古津八幡山古墳（国史跡）

草水の発見

慶長13（1608）年、加茂町の真柄仁兵衛は、新田開発の適地を探すため、新津丘陵周辺を回るうちに石油が染み出す場所をいくつか発見した。その内のひとつが、市指定文化財の「煮坪」である。仁兵衛は新発田藩の許可を得て、天ヶ沢・金津・塩谷・柄目木の４か所の油井の開発に成功し、柄目木新田に転居した。油の汲み取りと灯油の販売をなりわいとした真柄家は、藩へ役銀を納入し、明治の初めまで天ヶ沢新田の分家とともに４か所の油井の営業権を保持した。

煮坪　秋葉区草水町（市史跡）

石油王の誕生

金津村では、名主の坂井彦兵衛が新発田藩からの許可を得て油の汲み取りを行っていたが、文化元（1804）年、後任名主の中野次郎左衛門に営業権を売り渡した。次郎左衛門は「泉舎」と号し、油を取っていた。

明治５（1872）年、政府は鉱山資源を国有化し、翌年には鉱業事業への自由な参入を促した。金津村の中野貫一は、同7年に借区の許可を得て手掘り採掘を試み、出油に成功した。

同19年、新潟県は共同掘による「日本坑法」違反を理由として、貫一をはじめとする塩谷村地内の借区人の石油採掘を禁止し、借区権の返納を命じた。ところが、元工部省灯台局の職員・田尻義隆が塩谷坑区の借区を申請すると、同21年許可が下り、田尻は自ら採掘を行うことなく、東京の日本坑油会社に借区権を売却してしまった。

貫一は、「借区禁止は田尻らの策謀である」として、県知事をはじめ農商務大臣、内閣総理大臣に請願を重ねたが、採択されなかった。そこで貫一は、明治24年、農商務大臣（のちに新潟県知事に変更）を相手どり、東京の行政裁判所に訴えた。借区禁止の取り消しを勝ち取った貫一は、政府から損害賠償金を得たが、塩谷坑区の借区を回復することはできなかった。

貫一は、失った塩谷坑区の産油量の挽回を図るため、明治28（1895）年、金津地区の深層探脈に上総掘の技術を導入して産油に成功した。さらに同36年、機械掘に成功して産油量も増大し、当時の二大石油会社であった日本石油・宝田石油に次ぐ産油業者となり、「石油王」と呼ばれるまでになった。

大正期になるとロータリー掘削機の登場により、小口・朝日方面で油層が発見された。中野家が経営する中央石油所有の新津油田朝日鉱区では、大正5（1916）年に年間約27,000キロリットルの産油を記録し、第2次全盛期を迎えた。その後、輸入石油の増加や産油量の減少もあり、平成8（1996）年、中野家経営の丸泉石油興産が原油採掘を終了し、新津油田の歴史に幕が降りた。

現在、貫一とその子忠太郎の親子2代が築いた邸宅と庭園は、中野邸美術館として公開され、秋には色鮮やかな紅葉が、多くの観光客の目を楽しませている。

上総掘石油櫓（2/3復元模型）
石油の世界館　秋葉区地域課提供

花の名産地

日本一の生産量をほこる秋葉区のボケ
食と花の推進課提供

チューリップの球根は、大正期に小合地区で大規模な商業生産が始まった。戦時色が濃くなると、食料増産のために栽培が制限され、食用やでんぷん加工用となった。

昭和23（1948）年、小合村を本拠とする新潟県花卉輸出協会が設立され、再びチューリップの球根の輸出が始まった。昭和30年代に生産量を伸ばしたが、昭和40年代には連作障害などにより停滞傾向となり、切花栽培へと置き換わっていった。

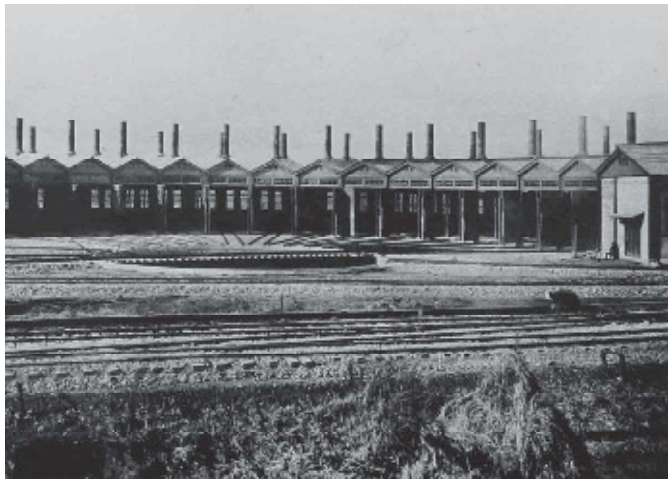
戦前から栽培されていたアザレアとサツキは、生産が拡大し、昭和40年代に活況を呈した。昭和40年代後半に小須戸地域の生産者によって接木栽培技術が確立され生産量が拡大したボケは、小須戸・小合・白根地区が国内生産量の9割を占め、質･量ともに全国1位の生産地となった。

鉄道の街

明治30（1897）年、北越鉄道の沼垂～一ノ木戸（現東三条駅）間が開通し、新津･矢代田両駅が開業した。同39年の鉄道国有法により、翌40年、北越鉄道が国有化されて信越線の一部となった。同43年には岩越線（現磐越西線）新津～馬下間が、大正元（1912）年には新発田線（現羽越本線）新津～新発田間が開通して新津は3路線4方向の分岐点となった。

同2年には新津機関庫、翌3年には新津運輸･保線両事務所、新津車掌所及び新津通信区、同5年には新津電力区が開設された。さらに昭和14（1939）年には新津電修場、同16年には車両整備のための新津工場が開設され、鉄道の街として発展を遂げた。

昭和58（1983）年に新津駅近くの旧国鉄施設を利用して開館した鉄道資料館は、平成10（1998）年に区東部に位置する旧新潟鉄道学園に移転した。同25（2013）年には、C57型蒸気機関車と200系新幹線を運び入れ、展示を改修して、翌26年に新装開館した。また、昭和44（1969）年から新津第一小学校で保存されていたC57型蒸気機関車が、平成11年に「SLばんえつ物語」号として復活し、新潟（当初は新津）～会津若松間を運行している。



新発田線全通当時の新津停車場扇形機関車庫

中ノ口川と歩む進取の地　―南区の歴史―

蛇行する中ノ口川　新潟県教育委員会撮影

たんぼの下から発見された鎌倉時代の村々

南区は信濃川の東側の本流と西側の西川の流れに囲まれた、越後の「川中島」地域である。昭和58（1983）年8月、庄瀬地域において馬場屋敷遺跡の発掘が行われ、鎌倉時代の建物跡、呪い札・鑑札などの遺物が水田の下から多数出土した。これは従来の常識を覆す、豊かな中世の生活を雄弁に物語るものであった。

信濃川の沖積地に広がる「川中島」地域の村々は、近年の発掘と神社に残る伝承などから、洪水や地震等の災害により、断続的に興廃を繰り返していた様子がうかがえる。その一方で茨曽根などでは、戦国時代には掘り上げ田などの技術を用いて新たな開発を進め、上杉氏の蔵入地の役割を果たしていた。

鎌倉時代の住居跡（馬場屋敷遺跡下層）

中ノ口川の開削と新田開発の展開

南区域では中ノ口川を挟んで同じ地名が見られ、新発田藩と村上藩の領地の村々が並存していた。南区の中心を流れる中ノ口川は、信濃川の自然流路を用いて戦国末期から近世初期に整備されたと考えられる。

新発田藩による治水工事の結果、白根郷では新田開発が進み、寛文年間（1661～1672）には現在の村がほぼ成立した。近世中期以降、白蓮潟・大潟・道潟をはじめとする低湿地とその周辺部が干拓され、さらに笠巻川の締切や信濃川の直流化工事などを経て、白根郷には豊かな耕地が広がっていった。

「新発田領内絵図」（白根郷部分）
新発田市立図書館所蔵　新潟県立図書館提供

川を下り、村を開く

国重要文化財旧笹川家住宅の当主であった笹川氏は、信濃国水内郡笹川村（飯山市）から味方の地に移住したと伝わり、慶安2（1649）年ころには村上藩の大庄屋となって、300年以上続いた名家である。

中ノ口川の西岸には、多数の浄土真宗寺院があり、北信濃や北陸地方からやってきたという由緒を持っている。戦国末期から近世初頭に一族郎党とともに、海を越え川を下ってやってきた真宗門徒たちは、越後の低湿地に根付いて新たな村を開き、「真宗王国新潟」を形成する一翼を担った。

笹川邸母屋（国重要文化財）

果樹栽培王国の形成過程

南区域は信濃川・中ノ口川の氾濫により稲作が不安定であった。そこで、江戸時代中期ころから、肥沃（ひよく）だが荒れ地が多かった堤外地にモモ・ナシを植えると、土壌との相性がよく作柄が良好だったため、盛んに栽培されるようになった。

大別当（おおべっとう）（月潟地区）には、洪水による転作を契機として、文化年間（1804～1818）に上総国（千葉県）から梨苗を取り寄せたという樹齢 200 年になる「類産（るいさん）」ナシ（国の天然記念物）がある。

明治期以降も果樹の生産量は増加し、ナシ・モモ・ブドウなどの一大生産地となったが、その背景には、黒星（くろぼし）病などの病害の克服とたゆまぬ栽培技術の向上があった。

特産品のル レクチェ　広報課提供

また、現在新潟を代表するかつて幻の洋ナシといわれた「ル レクチェ」は、明治後期にこの地域で栽培が始まった。

類産ナシ（国天然記念物）

耕地整理の先進地白根郷

白根郷では、明治期から基幹排水路の流末に動力排水機を設置するなど、積極的な治水事業を進めていた。しかし、大正11（1922）年の大河津分水の通水により、信濃川では用水不足が予測された。

新潟県内では、県営第１号の事業として白根郷用水改良事業が行われ、各地の揚水機を改築し、整備された用排水路系統を活用して耕地整理を行った。

地主層が主導したこの耕地整理は、当時全国最大級の事業であったため注目を集めた。白根郷では戦中戦後も土地改良事業を継続し、市域ではいち早く湿田を乾田化することに成功して、水稲生産の先進地と評価されるようになった。

耕地整理後の白根郷　昭和14（1939）年頃
白根郷土地改良区所蔵

川蒸気から自動車・電車交通へ

南区域では江戸時代以来、信濃川・中ノ口川の舟運が発達していたが、明治期になると川蒸気船が就航し、主要な交通手段として活躍した。大正期になると道路整備が進み、大正９（1920）年には乗合自動車が新潟～白根間に登場した。白根からは矢代田・巻・三条・燕・漆山などを結ぶ路線が発達し、陸上交通の要となった。

昭和２（1927）年、大河津分水自在堰の陥没により中ノ口川の水位が低下し、川蒸気船が航行不能になると、中ノ口川に沿って電気鉄道を建設する動きが促進され、同８年に新潟と白根、そして燕を結ぶ新潟電鉄が開通した。これらには、その時代の最先端の交通を導入した進取の地域性が見える。

「新潟電鉄沿線案内」新潟電鉄路線図

砂丘地と西川低地のくらし　―西区の歴史―

新川の上を立体交差で流れる西川

砂丘上に営まれた水辺の役所

西区は角田山東麓（とうろく）に始まる新潟砂丘と信濃川分流の西川沿いに開けた地域である。砂丘上には縄文時代から生活の跡が散見されるが、弥生時代後期（２世紀）には、信濃川と新潟砂丘の間の低地帯である六地山（ろくじやま）遺跡（曽和）で本格的な米作りが始まった。古墳時代前期（４世紀）には円墳で直径約30mの緒立八幡（おたてはちまん）神社古墳（黒鳥）が築造され、この地域の首長はヤマト政権に組み入れられていった。

奈良・平安時代（8～10世紀ころ）には、信濃川分流の西川低地の小砂丘上に的場遺跡（的場流通）・緒立遺跡（緒立流通）・四十石（しじっこく）遺跡（東山）等の蒲原郡の官衙（役所）関連遺跡が営まれた。多量の墨書土器、官人の装身具や祭祀の道具、大規模な倉庫等の建物跡は、この地の住人が公務に従事していたことをうかがわせる。

的場遺跡は越後国から都への貢納物であった「鮭」を獲り、加工する場であった。また、この遺跡から出土した「狄食（てきしょく）」と書かれた木簡は、服属した蝦夷等の東北系の人々を食事でもてなし、交流したことを示すものと考えられる。

「狄食」の墨書がある木簡
的場遺跡出土（県指定文化財）

中世の舞台となった西区域

元暦（げんりゃく）元（1184）年の「後白河院庁下文写（ごしらかわいんのちょうくだしぶみうつし）」（国上寺（こくじょうじ）文書）に、赤塚は弥彦神社領の北限として登場する。高野山清浄心院の「越後過去名簿」によれば、享禄２（1529）年には「カンハラ郡アカツカマチ」と記載され、町場となっていることをうかがわせる。

平島（へいじま）周辺は、西川と信濃川の合流地点に位置する交通の要衝であり、焼鮒（やきふな）（山田）など鎌倉時代前半の親鸞聖人来訪に関する伝説がある。永禄９（1566）年の魚沼市弘誓（ぐぜいじ）寺不動明王坐像墨書銘には「平嶋之郷新潟津」とあり、天正８（1580）年には上杉景勝が「平嶋之関」を置いたことから、戦国時代の「新潟津」の位置はこの付近にあったと考えることができる。さらに天正10年代の新発田重家の乱では、上杉景勝方は前線基地とした「木場城」を拠点として、新潟をめぐる攻防戦を展開した。

魚沼市弘誓寺不動明王坐像墨書銘
渡辺康文氏撮影　弘誓寺所蔵

内野新川の開削と水害克服の道

江戸時代になると、西川の自然堤防沿いと海岸砂丘のへりに新しい村が開発されていった。「○○小屋・○○郷屋・○○興野」や「○○新田」といった地名の新しい村は西川の周辺にも広がったが、鎧潟・田潟・大潟（通称：三潟）周辺の低湿地では、農作物の浸水被害が絶えなかった。西区の村々では、水害等の損害や土地の収益を分かち合うために、定期的に耕地

新川底樋増設絵図　天保4（1833）年　個人蔵（市指定文化財）

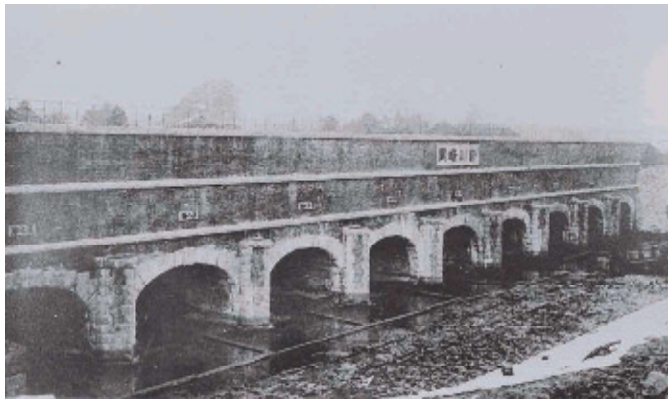
交換して平等化する割地（軒前）制度が行われた。さらに洪水から村を守る囲い土手も造られた。

江戸時代半ば以降、砂丘を堀割開削して川や潟を排水する工事計画が幾度となく請願されたが、いずれも新潟町の反対で実現しなかった。しかし、三潟周辺地域の長岡・村上藩領の農民の熱意により、文化14（1817）年に堀割の許可が下り、難工事の末、文政３（1820）年に大潟から五十嵐浜までの内野新川（三潟悪水抜堀割）が通水した。

内野新川は内野金蔵坂を掘削し、幅約5.4m、長さ約76mの木製樋管２門を西川の下に埋め込んで立体交差させた川であった。総工費は２万1,667両、人足は延べ165万2,700人、関係した村は52か村に及んだ。長岡藩領の負担した工費の９割近くは願人16人が調達したものであった。

明治時代を迎えても治水事業は最優先課題であった。明治15～19（1882～86）年に中ノ口川堤防改修工事が、さらに明治30年代末には山田島付近の信濃川河道変更工事が完成した。明治44（1911）年には、坂井郷普通水利組合によって、坂井郷330余町歩の排水を目的として約1.7kmの関屋堀割が開削された。

一方、内野新川と樋管は、幕末以降3度の大改修を経て、大正2（1913）年には9連アーチ型の新川暗渠が樋管に代わって設置された。昭和30（1955）年には西川水路橋が完成し、新川暗渠は撤去された。



大正２（1913）年に完成した新川暗渠
西蒲原土地改良区所蔵

内野と大野

戦前の大野町の風景

西区には北国街道が横断していた。宿場である赤塚は、往来する人々の荷物を運搬する馬や人足が輪番制で近隣から徴集された。内野は西川沿いで新潟町と赤塚の中間に位置し、内野新川開削工事を契機として在郷町に発展した。信濃川と中ノ口川の合流部に位置する「大野」は、享保年間ころから大野町と呼ばれ、江戸時代中期には六斎市が開設されて集散地として賑わった。

明治７（1874）年に信濃川に川蒸汽船が就航すると大野は新潟～長岡間の着船場となった。そして大正９（1920）年には黒埼商会が新潟～大野間で、現市域における最初のバス事業を開始した。一方、大正元（1912）年には越後鉄道白山～西吉田間の開通と同時に内野駅が開業し、昭和８（1933）年には、新潟電鉄が黒埼地域を縦貫した。

砂丘地農業と市街化の進展

明治・大正期以来、西区の砂丘地帯では雑穀・ダイコン・カボチャ等が栽培されてきたが、昭和33（1958）年に内野地区でスプリンクラーが導入されて以降、タバコ・スイカ栽培が盛んになった。

西区の西川沿いの旧町村は、同29年の坂井輪村を皮切りに順次新潟市と合併した。坂井輪地区の小針・寺尾では、昭和30年代以降砂丘地から新興住宅地の開発が始まり、越後線や国道沿線・産業道路を軸に、ベッドタウンは内野・黒埼地区へと広がっていった。

昭和45（1970）年から新潟大学が五十嵐キャンパスへ移転を始めると、地域一帯は住宅地となった。同53年には北陸自動車道の新潟（西）～長岡間が県内で最初に開通し、同57年には物流拠点の流通センターが完成するなど、西区域は拡大する新潟市域の象徴として、市街化推進の原動力的な役割を果たした。

昭和33年度完成の寺尾の公営住宅
（『昭和33年度 新潟市勢要覧』より転載）

角田山を望む歴史ロマンが息づく郷土 ―西蒲区の歴史―

角田山と田園

菖蒲塚古墳と菖蒲の前

角田山麓の丘陵地に菖蒲塚古墳がある。その昔、平家追討で挙兵したが敗れて自害した源頼政の室、菖蒲の前が難を逃れて越後へ下り、この地に隠棲し葬られた塚であるという伝説がある。古墳の麓にある竹野町の古刹、金仙寺には「菖蒲前貞阿禅尼」の石塔がある。

実際にはこの古墳は伝説よりも古く、古墳時代前期（4世紀）に造られた。全長53mの前方後円墳で、西蒲の地にヤマト政権の勢力が及んだことを示す貴重な文化財である。菖蒲塚古墳は国の史跡に指定され、出土した勾玉や管玉、竜龍鏡はそれぞれ国や新潟県の文化財となっている。

「菖蒲前貞阿禅尼」の石塔（左端）金仙寺境内

天神山城跡と松岳山城跡

天神山城は標高234mの天神山にあり東西約500m、南北約200mの規模の山城である。築城時期は不明だが、南北朝時代以降は小国氏の支配する拠点であった。小国氏は後に上杉氏の有力な家臣となった。

上杉景勝に仕えた直江兼続の弟は、景勝の命で小国氏を継ぎ、大国実頼（小国を改姓）として城主となった。慶長3（1598）年、上杉氏の会津への国替えに実頼も付き従ったため、天神山城は廃城となった。

天神山の北東に位置する標高174mの松岳山（松ケ岳）には松岳山城があった。天神山城の支城の役割を果たしたとされる。この山にも、菖蒲の前が小国氏の庇護を受けたとの言い伝えが残されている。

天神山城址之碑（市史跡）

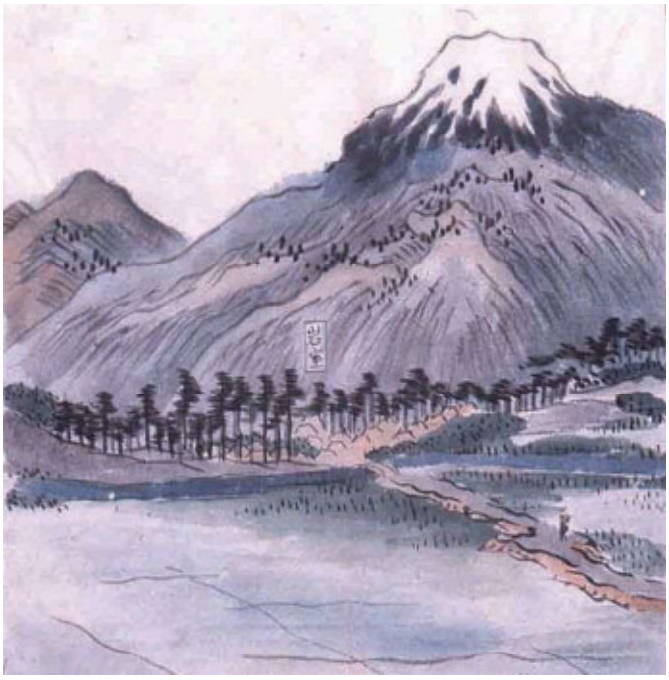
岩室温泉の賑わい

西蒲区の角田山と多宝山の麓の地域には、青龍寺や種月寺などの古刹があり古くから信仰と人々の往来で栄えてきた。江戸時代になり新潟町から赤塚（西区）を経て、稲島・岩室（西蒲区）を通り、弥彦にいたる北国街道が整備された。

岩室温泉は「霊雁の湯」とも呼ばれている。それは傷ついた雁が岩の間から湧き出た泉流で傷を癒している所から、源泉が見つかったという伝説にちなんでいる。慶長3（1598）年の検地帳には、「ゆのこし」の小字名もあり、すでに温泉が発見されていたとみられる。

岩室が温泉場として公認されたのは、正徳3（1713）年である。岩室の村の人々が石瀬代官所に役金を上納して、「温泉所」として認められたのである。江戸時代の中ごろには、37軒の湯組が「薬湯役」を納めていた。

こうして北国街道の宿場で弥彦神社にも近い岩室温泉は、旅人や参拝客で賑わうようになった。嘉永5（1852）年2月14日には、東北・越後・佐渡を遊歴中の吉田松陰も一泊している。



『いや彦紀行』より幕末の岩室温泉　新潟県立図書館所蔵

代官所と他所稼ぎ

西蒲区の中心を流れる西川は、長岡藩領であった新潟町や領内の村々と長岡城下を結ぶ舟の交通が盛んであった。村の支配と年貢米の収納のため、西川に沿った巻と曽根には、藩の代官所が置かれていた。17世紀中ごろから約250年間曽根組の要として置かれた曽根代官所の跡地には、当時をしのぶ樫の木が残り、市の指定文化財として地域で大切に守られている。

西蒲区の海岸部の集落は、江戸時代に他所に稼ぎに出る大工と毒消しを生み出した地として有名である。江戸時代後半、間瀬や五ヶ浜からは毎年多くの他所稼ぎがあり、その大部分が大工であった。主に冬場に関東や福島に小グループで働きに出かけていた。優秀な大工が育ち「間瀬大工」や「五ヶ浜大工」と言われていた。

また、元治元（1864）年の『越後土産（初編）』には角海浜の毒消しが書かれており、江戸時代後半から女性による他所での毒消し売りが始まっている。毒消しは、明治以降も各村で製造され、広く他県に特産として知られるようになった。

曽根代官所跡　樫の木　曽根小学校（市天然記念物）

入徳館と新保正與

長岡藩が戊辰戦争の後贈られてきた米を、学校の建設に充てた「米百俵」の逸話は有名であるが、贈り主の三根山藩（明治３年峰岡藩と改称）も長岡藩同様、教育に熱心であった。

藩の学問所と武道の稽古場を明治維新後に併称して入徳館と称した。明治３（1870）年、江戸で学んだ曽根の国漢学者、新保正與を「大教授」として迎えた。明治４年の廃藩置県で藩校は廃止され、翌年の学制発布で私学峰岡校となったが、新保は与えられた官舎を寄宿舎に充て生徒と起居を共にして子弟を教え、「峰岡教員と村松巡査」とのちに言われたほど、多くの教員がこの地から育った。

入徳館の名は昭和16（1941）年に復活し、同53（1978）年まで小学校名として受け継がれ、現在は入徳館野外研修場となっている。

新保正與の碑　三根山藩址公園

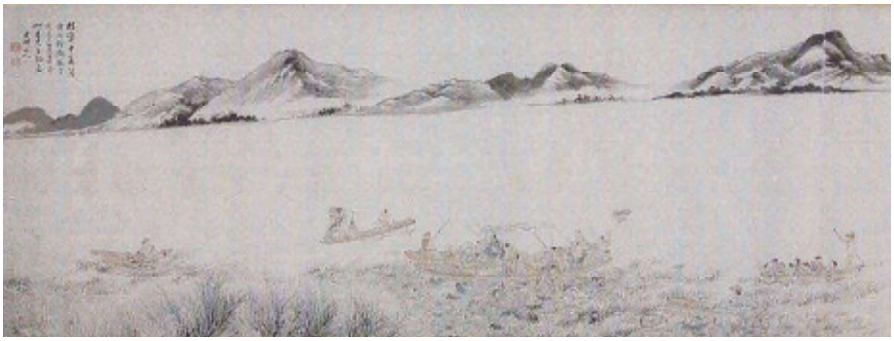
鎧潟の干拓と暮らし

鎧潟はかつて西蒲原低地のほぼ中央に位置していた。鎧潟の名の由来は、源義家が黒鳥兵衛を討伐に来たとき、泥の付いた鎧を洗ったことにちなむという伝説がある。

江戸時代の安永8（1779）年には面積は約1,500haだったが、新田開発により約600haとなり明治を迎えた。明治以降も開発が続き昭和30（1955）年には約250haとなっていた。

昭和34年、国営の鎧潟干拓事業が実施された。同41年６月に干陸式が行われた。翌年からは県営の圃場整備が始まり、鎧潟の干拓により約235haの水田が新たに造成された。また、周辺の整備も進められ、西蒲区は県内有数の穀倉地帯となった。

干拓以前、鎧潟周辺の人々は多くの困難を味わった。一方、鎧潟でのコイ･フナ･ウナギ･エビなどの漁、ヒシの実やレンコンの収穫、冬場のカモ猟など、豊かな恵みと暮らしや文化を人々に与えてくれた。

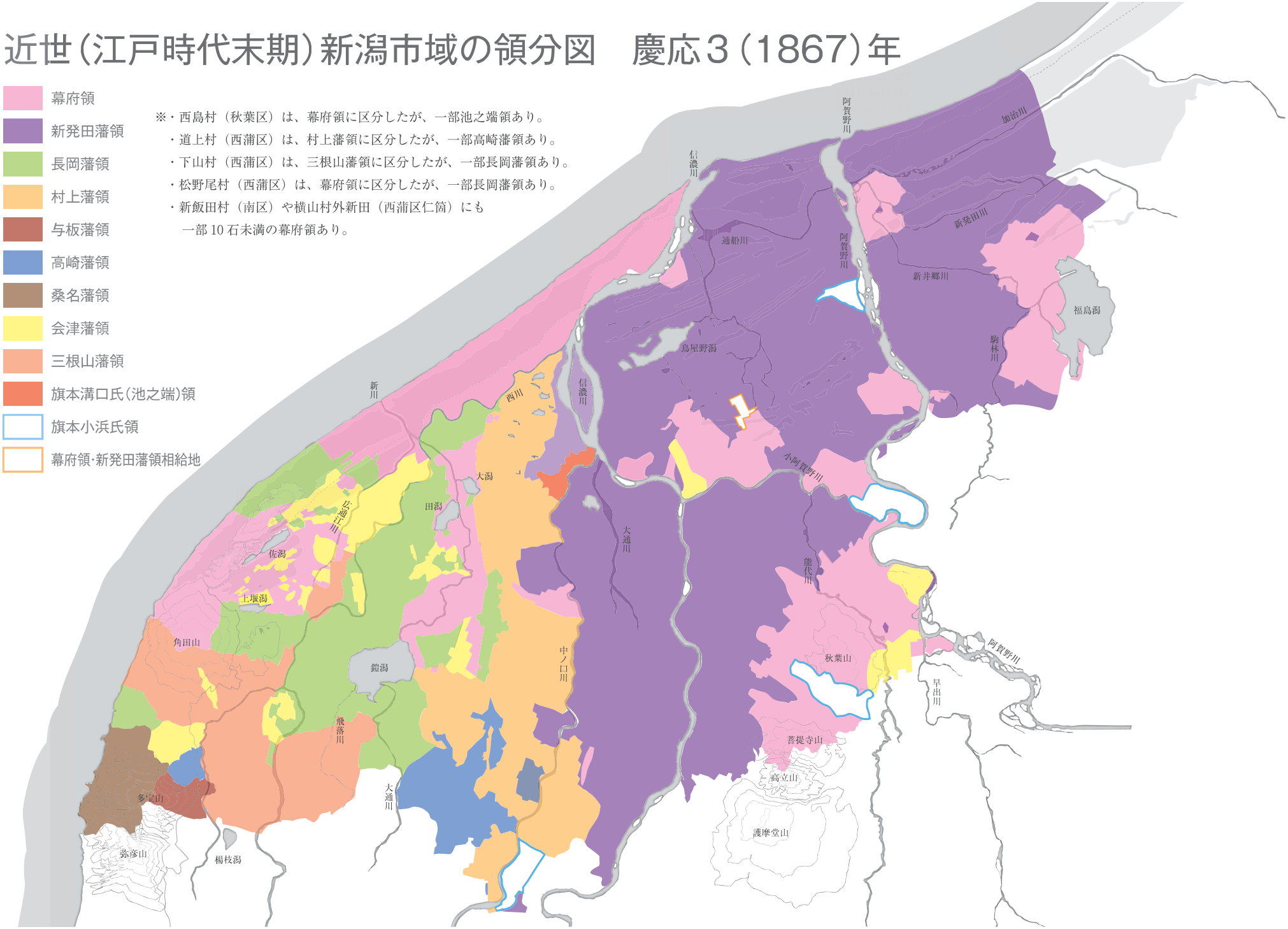


飯島半耕画「鎧潟船遊びの画」　明治17（1884）年

近世（江戸時代末期）新潟市域の領分図　慶応３（1867）年

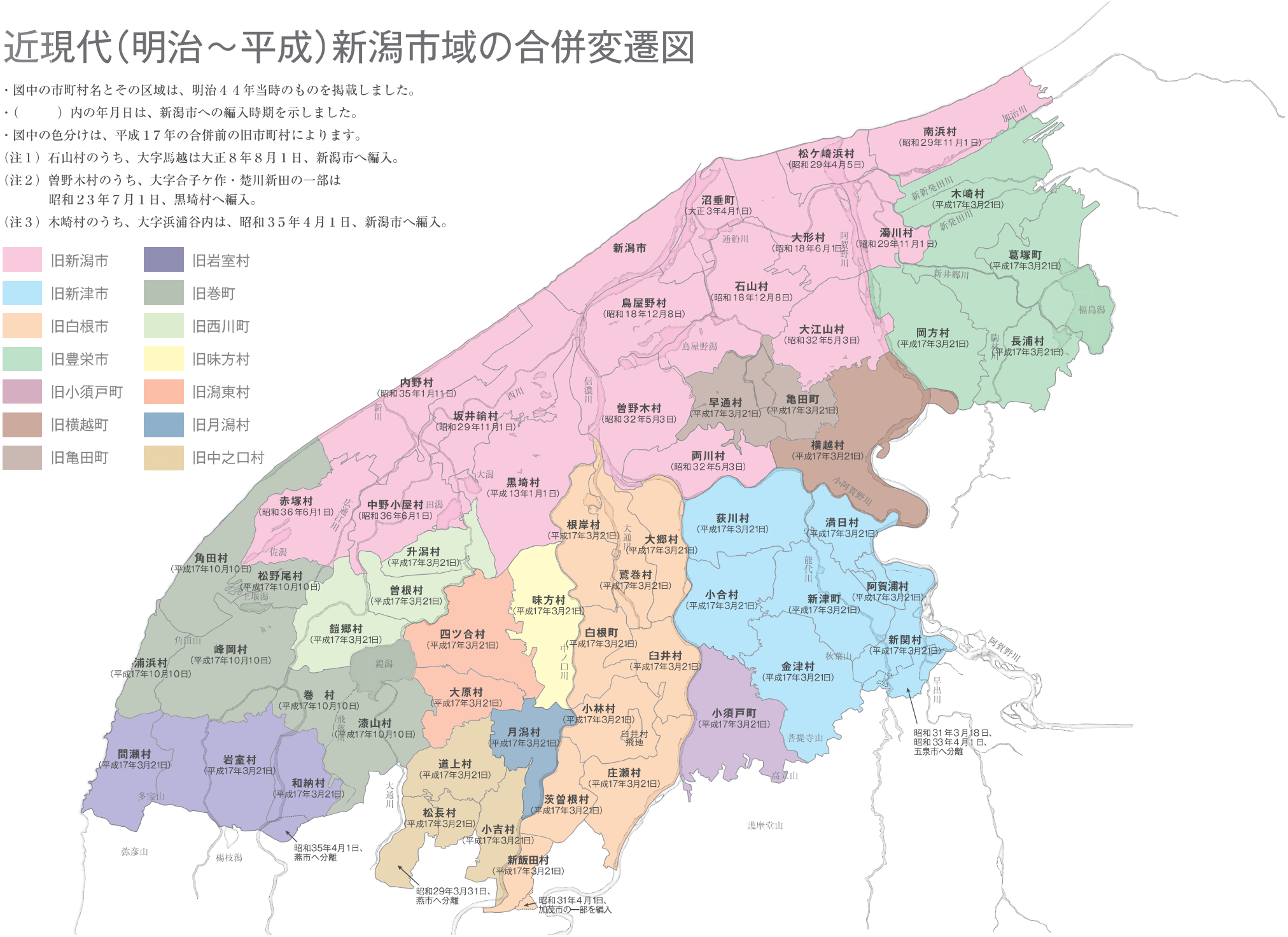
- 幕府領
- 新発田藩領
- 長岡藩領
- 村上藩領
- 与板藩領
- 高崎藩領
- 桑名藩領
- 会津藩領
- 三根山藩領
- 旗本溝口氏（池之端）領
- 旗本小浜氏領
- 幕府領・新発田藩領相給地

※・西島村（秋葉区）は、幕府領に区分したが、一部池之端領あり。
・道上村（西蒲区）は、村上藩領に区分したが、一部高崎藩領あり。
・下山村（西蒲区）は、三根山藩領に区分したが、一部長岡藩領あり。
・松野尾村（西蒲区）は、幕府領に区分したが、一部長岡藩領あり。
・新飯田村（南区）や横山村外新田（西蒲区仁箇）にも
一部 10 石未満の幕府領あり。



近現代（明治～平成）新潟市域の合併変遷図

・図中の市町村名とその区域は、明治４４年当時のものを掲載しました。
・（　　）内の年月日は、新潟市への編入時期を示しました。
・図中の色分けは、平成１７年の合併前の旧市町村によります。
（注１）石山村のうち、大字馬越は大正８年８月１日、新潟市へ編入。
（注２）曽野木村のうち、大字合子ケ作・楚川新田の一部は
　　昭和２３年７月１日、黒埼村へ編入。
（注３）木崎村のうち、大字浜浦谷内は、昭和３５年４月１日、新潟市へ編入。



新潟市歴史地図

日本海
0
2km
目和山展望台
西海岸公園
水戸教公園
水族館
美術館
金刀比羅神社
雛船彫刻絵馬
五十嵐浚明筆 三十六歌仙図 扁額
(新潟大神宮)
旧齋藤氏別邸庭園【名勝】
新潟西港
北方文化博物館 新潟分館
主屋・洋館ほか
旧小澤家住宅
主屋・新座敷・
離れ座敷他
湊稲荷神社
願懸け高麗犬
新潟大学 旭町学術資料展示館ほか
NEXT21
新潟市上水道敷設関係資料
(歴史文化課)
新津記念館
木造菩薩立像
(瑞光寺)
金刀比羅神社奉納模型和船
【重要有形民俗文化財】
県立万代島美術館
中央埠頭
新潟市役所
中央区役所
白山駅
白山公園
(明和義人顕彰碑)
大船絵馬(白山神社)
愛宕神社 本殿・拝殿
柳都大橋
新潟県議会旧議事堂 附 棟札 2 枚
【重要文化財】
萬代橋【重要文化財】
やすらき堤
信濃川
昭和大橋
八千代橋
バスセンター
越後線
東大通
万代口
新潟駅
木造伝畠山重宗
夫妻坐像
(蒲原神社)
鍔口 直治七戊申年銘
附 天保十一年
丹羽思亭拓本識語 1 幅
(沼垂白山神社)
上越新幹線
けやき通
南口
信越本線・白新線
0
3km
中央区
関屋分水路
関屋
白山
新潟
青山
鳥屋野
逆ダケの藪
【天然記念物】
鳥屋野潟
新潟亀田IC
寺尾
新川
新川漁港
堀直竒文書
(新潟大学附属図書館)
新潟大学前
新潟西 IC
新潟中央 IC
的場遺跡
緒立遺跡
治水偉績碑
内野
内野西が丘
西区
西川
南区
佐潟
越後赤塚
巻漁港
角田岬
上堰潟
大樫
越後曽根
上越新幹線
中ノ口川
日本チューリップ発祥の地記念碑
角田山
481
旧笹川家住宅【重要文化財】
諏訪神社本殿
菖蒲塚古墳【史跡】
越後毒消しコレクション
(巻郷土資料館)
鎧潟干拓地
越後の凧合戦習俗
西蒲区
三根山藩址
金仙寺
巻
木造地蔵菩薩
半跏像(茂林寺)
【重要文化財】
山谷古墳
銅造観音菩薩立像
(遍照寺)
岩室温泉
間瀬枕状熔岩
巻潟東 IC
松岳山城址
天神山城址
越後線
多宝山
634
浄専寺庭園
岩室
月潟の類産ナシ
【天然記念物】
田上
弥彦山
634
北吉田
北陸自動車道
羽生田
弥彦
矢作
吉田
弥彦線
西燕

（市域の主な文化財）

記号凡例

- ● 国の指定文化財
- ● 県の指定文化財
- ● 市の指定文化財
- ● 国の登録文化財
- ▼ 本編関連地点

①北区郷土博物館

● 市の指定文化財
- ・北辰隊関係資料
- ・木崎小作争議資料

② 江南区郷土資料館

● 県の指定文化財
- ・亀田町上水道敷設関係資料

● 市の指定文化財
- ・亀田八景　版木

③ 北方文化博物館

● 国の重要文化財
- ・雪村友梅墨跡梅花詩

● 国の登録有形文化財
- ・北方文化博物館　主屋・大広間ほか

④ 文化財センター

● 県の指定文化財
- ・的場遺跡出土品
- ・浦廻遺跡出土品
- ・南赤坂遺跡出土品

● 市の指定文化財
- ・緒立土器
- ・馬場屋敷遺跡出土品
- ・山谷古墳出土品
- ・葛塚遺跡出土朱塗り線刻人物画土器

⑤ 潟東歴史民俗資料館

● 市の指定文化財
- ・横田切れの記録（腰板）
- ・鎧潟で使用されていた漁労・狩猟用具

⑥ 種月寺

● 国の重要文化財
- ・種月寺本堂　附　棟札２枚

● 県の指定文化財
- ・南英謙宗墨跡書籍

⑦ 法光院

● 国の重要文化財
- ・絹本著色不動明王二童子像

● 県の指定文化財
- ・絹本著色三千仏図
- ・絹本著色慈恩大師像

※見学者の対応なし

⑧ 敦井美術館

● 国の重要文化財
- ・彩磁禽果文花瓶　板谷波山作

● 県の指定文化財
- ・渭城柳色 大雅筆 附 大雅書「渭城柳色」

⑨ 新潟市歴史博物館

● 国の重要文化財
- ・旧新潟税関庁舎　附　棟札１枚

● 国史跡
- ・旧新潟税関

● 国の登録有形文化財
- ・旧第四銀行住吉町支店

● 県の指定文化財
- ・新潟奉行川村修就関係資料

● 市の指定文化財
- ・大黒天図　五十嵐浚明筆　竹内式部賛
- ・五姓田芳柳筆　「新潟萬代橋」図
- ・五姓田芳柳筆　八木朋直肖像
- ・五姓田芳柳筆　鈴木長蔵肖像
- ・竹内式部書　「松」一字　五言対句
- ・竹内式部筆　三宅島流人罪名帳　断簡
- ・笹山前遺跡出土縄文時代の深鉢形土器
- ・六灯ランプ（旧新潟税関使用シャンデリア）
- ・松平忠輝関係文書
- ・堀直奇文書
- ・飴屋看板　良寛書刻字

＜凡例＞

○市内にある国・県・市の指定文化財、国の登録文化財のうちで主なもの、『新潟市のあゆみ』本編と関わりのある文化財および歴史的地点を掲載しました（所蔵品は原則非公開）。

●以下の文化財は除外しました
- ・個人宅にある文化財
- ・市内の歴史文化施設に寄託されている資料や、市外で出土した遺物など
- ・天然記念物のうち、一部の動植物

★文化財はかけがえのない貴重なものです。見学の際は、マナーを守って見学してください。

新潟市歴史年表

・明治５（1872）年 12 月２日までは太陰暦を用い、以後は太陽暦を用いました。
・月日は３月３日を 3.3 のように記しました。

年　代	記　事
BC4000	大江山地区（江南区）や福井地区（西蒲区）の砂丘に縄文時代前期の集落が現れる。
2C ～ 3C	角田山麓や新津丘陵に高地性集落が営まれる。
4C	角田山麓や新津丘陵に古墳が造られる。緒立八幡神社古墳（西区）が造られる。
6C	高志深江国造が「国造本紀」に見える。
647　大化３	渟足柵が設置され、柵戸が置かれる。
690	このころ越国が越前・越中・越後に分割され、渟足以北が越後国となる。
702　大宝２	蒲原・古志・魚沼・頸城の４郡が、越中国から越後国へ編入される。
8C 前半	笹神丘陵と新津丘陵で鉄と須恵器の生産が盛んになる。
927　延長５	『延喜式』が完成し、蒲原郡 13 社・沼垂郡５社の神名、蒲原津湊などが記される。
931～938 承平年間	蒲原郡５郷・沼垂郡３郷の郷名、国府の所在地などが『和名抄』に記される。
1335　建武２	南北朝の動乱により、南朝方と北朝方による蒲原津の争奪戦が始まる。
1551　天文 20	上杉謙信が三ヶ津（沼垂・蒲原・新潟）の横目代官職に大串氏を任命する。
1581～1582 天正 9～10	新発田重家が上杉景勝の支配下にあった新潟津の通行税をとる権利を押領し、両者は対立する。 重家に対抗するため景勝方は木場城（西区）を築き、重家方は新潟津の町人を人質に取る。
1586　天正 14	上杉景勝方が新潟・沼垂を新発田重家から奪い取る。
1587　天正 15	上杉景勝が新発田城を攻略し、新発田重家を滅ぼして越後を統一する。
1598　慶長３	1.10　豊臣秀吉が上杉景勝に会津（福島県）への国替えを命じる。
	4.2　春日山へ北ノ庄（福井県）の堀秀治、新発田へ大聖寺（石川県）の溝口秀勝、 村上へ小松（石川県）の村上頼勝が移り、新潟市域は堀秀治領と溝口秀勝領になる。
1600　慶長５	会津の上杉景勝が兵を越後に進入させ、越後一揆が起こる。
1655　明暦１	この年、新潟町が白山島へ移転する。
1684　貞享１	この年、沼垂町が４度目の移転により、蒲原から現在地へ移転する。
1697　元禄 10	この年、新潟湊の入津船が 40 か国余り、取扱額約 46 万両を記録する。
1710　宝永７	小新・亀貝など村上領の村民が幕領編入を求めて越訴する。翌年、幕府が首謀者を処罰する。
1730　享保 15	幕府が新発田藩に命じて松ケ崎堀割を完成させる。
1731　享保 16	この年の春、雪解け水による洪水で松ケ崎堀割が決壊し、阿賀野川の本流となる。
1768　明和５	9.26～27　新潟町で明和騒動が起こり、涌井藤四郎らが約２か月にわたり町政を掌握する。
1770　明和７	8.25　長岡藩が明和騒動の首謀者涌井藤四郎・岩船屋佐次兵衛を処刑する。
1820　文政３	1.　内野新川が完成、通水する。
1843　天保 14	6.　幕府が長岡藩から新潟町を上知し、勘定吟味役川村修就を初代新潟奉行に任命する。
1858　安政５	幕府がアメリカなど５か国と修好通商条約を締結し、新潟の開港を定める。
1868　慶応４	1.3　鳥羽・伏見の戦いが始まる。
	7.25　新政府軍が太夫浜（北区）に上陸する。
	7.29　新政府軍が新潟町を占領し、新潟町は新潟民政局の支配下に入る。
1868　明治１	9.8　明治と改元する。
	11.19（西暦1869年1月1日）　新政府が新潟を開港する。
1869　明治２	10.5　関税業務を取り扱う新潟運上所が開所する（明治6年1月、新潟税関と改称）。

年　代	記　事
1870　明治３	3.7　政府が水原県を廃止して新潟県を設置し、県庁が新潟町に移る。
1872　明治５	新潟県令楠本正隆が着任し、県内で大区小区制が実施される。
1873　明治６	5.31　大蔵省が第四国立銀行の設立を認可する（営業開始は明治７年３月）。
1879　明治 12	4.28　新潟県が郡区町村制を実施し、新潟は区となり、蒲原郡は５郡に分かれる。
1883　明治 16	3.27　新潟県会議事堂が落成する。
1886　明治 19	11.4　初代萬代橋の開通式が挙行される。
1889　明治 22	4.1　「市制」・「町村制」が施行される。新潟区が新潟市となり、町村合併が実施される。
1896　明治 29	7.　新潟県全域で大水害が起こる（横田切れ・木津切れ）。
1897　明治 30	11.20　北越鉄道の沼垂～一ノ木戸間が開通し、沼垂駅が開業する。
1901　明治 34	11.1　新潟県が大規模な町村合併を実施する。
1904　明治 37	5.3　流作場に新潟駅が開業する（現在地に新潟駅が開業するのは昭和33年4月）。
1909　明治 42	12.22　２代目萬代橋が開通する。
1914　大正３	4.1　沼垂町が新潟市と合併する。
1922　大正 11	8.25　大河津分水が通水する。
1926　大正 15	3.31　県営埠頭が完成する。
1929　昭和４	8.23　３代目萬代橋の竣工式が挙行される。
1931　昭和６	9.1　上越線が全線開通する。
1932　昭和７	「満州国」が建国され、新潟港からも満州へ兵士が派遣される。
1938　昭和 13	8.12　政府が新潟港を満州開拓民の出発港に指定する。
1945　昭和 20	8.11　新潟市民に疎開を命じる知事布告が伝えられる。
	8.15　昭和天皇の「終戦の詔勅」がラジオで放送される。 新潟県が新潟市に出した緊急疎開命令を解除する。
	9.25　新潟市へ進駐したアメリカ軍が、市公会堂に師団司令部を置く。
1948　昭和 23	6.13　栗ノ木排水機場の運転が始まる。
1950　昭和 25	8.1　新潟県内の農地改革が終了する。
1956　昭和 31	この年から、地盤沈下による浸水騒ぎが新潟港周辺で起こる。
1959　昭和 34	12.14　北朝鮮帰還者を乗せた帰還船第１船が、新潟港から出港する。
1964　昭和 39	6.16　マグニチュード 7.5 の新潟地震が発生する。
1965　昭和 40	6.12　阿賀野川流域に有機水銀中毒（新潟水俣病）患者の発生が発表される。
1969　昭和 44	11.19　新潟東港の開港宣言が行われる。
1972　昭和 47	8.10　関屋分水路の通水式が行われる。
1973　昭和 48	6.15　新潟～ハバロフスク間に定期航空路が開設される。
1978　昭和 53	9.21　北陸自動車道の新潟～長岡間が開通する。
1982　昭和 57	11.15　上越新幹線の新潟～大宮間が開通する。
1989　平成１	9.16　新潟～新発田間を結ぶ新新バイパスの全線が開通する。
2001　平成 13	1.1　新潟市と黒埼町が合併する。
2002　平成 14	6.　新潟スタジアムで 2002FIFAワールドカップの３試合が開催される。
2005　平成 17	新潟市と近隣13市町村が合併し、人口が 80 万人を超える。
2007　平成 19	4.1　新潟市が本州日本海側初の政令指定都市となり、区制を施行する。

主な参考文献

新潟市史編さん原始古代中世史部会　『新潟市史』資料編1原始古代中世(1994年)
新潟市史編さん近世史部会　『新潟市史』資料編2近世Ⅰ(1990年)
新潟市史編さん近世史部会　『新潟市史』資料編3近世Ⅱ(1992年)
新潟市史編さん近世史部会　『新潟市史』資料編4近世Ⅲ(1993年)
新潟市史編さん近代史部会　『新潟市史』資料編5近代Ⅰ(1990年)
新潟市史編さん近代史部会　『新潟市史』資料編6近代Ⅱ(1993年)
新潟市史編さん近代史部会　『新潟市史』資料編7近代Ⅲ(1994年)
新潟市史編さん現代史部会　『新潟市史』資料編8現代Ⅰ(1991年)
新潟市史編さん現代史部会　『新潟市史』資料編9現代Ⅱ(1993年)
新潟市史編さん自然部会　『新潟市史』資料編12自然(1991年)
新潟市史編さん原始古代中世史部会・近世史部会
『新潟市史』通史編1原始古代中世近世(上)(1995年)
新潟市史編さん近世史部会　『新潟市史』通史編2近世(下)(1997年)
新潟市史編さん近代史部会　『新潟市史』通史編3近代(上)(1996年)
新潟市史編さん近代史部会　『新潟市史』通史編4近代(下)(1997年)
新潟市史編さん現代史部会　『新潟市史』通史編5現代(1997年)

新潟市　『新潟湊の繁栄』新潟歴史双書1(1998年)
新潟市　『戦場としての新潟』新潟歴史双書2(1998年)
新潟市　『新潟歴史物語』新潟歴史双書3(2000年)
新潟市　『白山公園あたり』新潟歴史双書4(2000年)
新潟市　『新潟の堀と橋』新潟歴史双書5(2001年)
新潟市　『新潟市の文化財』新潟歴史双書6(2002年)
新潟市　『新潟港のあゆみ』新潟歴史双書7(2003年)
新潟市　『新潟の地名と歴史』新潟歴史双書8(2004年)
新潟市　『萬代橋と新潟』新潟歴史双書9(2005年)
新潟市　『新潟市の伝説』新・新潟歴史双書1(2006年)
新潟市　『新潟市の遺跡』新・新潟歴史双書2(2007年)
新潟市　『石油王国・新潟』新・新潟歴史双書3(2008年)
新潟市　『内野新川』新・新潟歴史双書4(2009年)
新潟市　『鉄道と新潟』新・新潟歴史双書5(2010年)
新潟市　『新潟砂丘』新・新潟歴史双書6(2011年)
新潟市　パンフレット『新潟市のあゆみ』(2007年)

新潟市教育委員会(文化スポーツ部歴史文化課編)
『平成26年度新潟市文化財調査概要』(2015年)
新潟市教育委員会(新潟市文化財センター編)
『国史跡古津八幡山遺跡　保存整備事業報告書』(2013年)
新潟市文化財センター　『シンポジウム　蒲原平野の王墓　古津八幡山古墳を考える
―1600年の時を越えて―』記録集(2013年)

新潟市教育委員会　『東囲遺跡　卸売市場建設に伴う市道東8-273建設事業用地内
発掘調査報告書』(2003年)
新潟市教育委員会(新潟市埋蔵文化財センター編)
『駒首潟遺跡　第3・4次調査―大型小売店舗建設に伴う駒首潟遺跡
第3・4次発掘調査報告書―』(2009年)
新潟市教育委員会(新潟市文化財センター編)
『四十石遺跡　第2次調査―(仮称)新赤塚埋立処分地整備工事に
伴う四十石遺跡第2次発掘調査報告書―』(2012年)

豊栄市　『豊栄市史』通史編(1998年)
亀田町史編さん委員会　『亀田の歴史』通史編上巻(1988年)
亀田町史編さん委員会　『亀田の歴史』通史編下巻(1988年)
亀田町史編さん委員会　『亀田の歴史』資料編(1990年)
横越町史編さん委員会　『横越町史』通史編(2003年)
横越町史編さん委員会　『横越町史』資料編(2000年)
新津市　『新津市史』通史編　上巻(1994年)
新津市　『新津市史』通史編　下巻(1993年)
小須戸町史編さん室　『小須戸町史』(1983年)
白根市　『白根市史』通史編(1989年)
味方村誌編纂委員会　『味方村誌』通史編(2000年)
月潟村誌編輯委員会　『月潟村誌』(1978年)
黒埼町　『黒埼町史』通史編(2000年)
巻町　『巻町史』通史編上巻(1994年)
巻町　『巻町史』通史編下巻(1994年)
岩室村史編纂委員会　『岩室村史』(1974年)
新発田市史編さん委員会『新発田市史』上巻(1980年)

三条市史編修委員会　『三条市史』上巻(1983年)
白根市教育委員会編　『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』(1983年)

新潟市歴史博物館　『新潟市歴史博物館総合ガイドブック』(2004年)
新潟市歴史博物館　平成16年度企画展図録
『新潟の乗り物―都市を支えたバスと鉄道―』(2004年)
新潟市歴史博物館　平成16年度特別展図録
『新潟の鮭―鮭を求めて1000年／2000kmの航跡―』(2004年)
新潟市歴史博物館　平成19年度企画展図録
『西暦647年にいがた―渟足柵の謎にせまる―』(2007年)
新潟市歴史博物館　平成20年度特別展図録『絵図が語るみなと新潟』(2008年)
新潟市歴史博物館　平成21年度企画展図録
『蒲原平野の20世紀―水と土の近代―』(2009年)
新潟市歴史博物館　開館10周年記念特別展図録『大新潟湊展』(2014年)

亀田郷土地改良区　『水と土と農民(亀田郷土地改良誌)』(1976年)
木村　礎校訂　『旧高旧領取調帳　中部編』(1977年)
池　享・原　直史[編]
『街道の日本史24　越後平野・佐渡と北国浜街道』(吉川弘文館 2005年)
岡村　浩ほか[編]　『亀田郷ゆかりの文人集』(2005年)
中村　義隆　『割地慣行と他所稼ぎ』(刀水書房 2010年)
田子　了祐　『越後における真宗の展開と蒲原平野』(考古堂 2013年)

日本石油株式会社内日本石油史編集室　『日本石油史』(1958年)
日本石油株式会社社史編さん室他　『日本石油百年史』(1988年)
日本国有鉄道新潟支社修史委員会　『三十年史』(1967年)
日本国有鉄道新潟鉄道管理局編さん委員会　『新潟鉄道管理局　五十年史』(1987年)

新潟大学考古学研究室「新潟県新潟市牡丹山諏訪神社古墳測量調査報告」
(『新潟大学考古学研究室調査研究報告』14　2014年)
新潟大学考古学研究室「新潟県新潟市牡丹山諏訪神社古墳発掘調査報告」
(『新潟大学考古学研究室調査研究報告』15　2015年)
小林　昌二　「古代越後の蒲原郡・沼垂郡―新潟市西区四十石遺跡にふれて―」
(『新潟史学』第63号　2010年)
山本　隆志　「【史料紹介】高野山清浄心院「越後過去名簿」(写本)」
(『新潟県立歴史博物館研究紀要』第9号　2008年)
前島　敏　「魚沼郡弘誓寺所蔵「木造不動明王坐像」と戦国期新潟津不動院」
(『新潟史学』第64号　2010年)
長谷川　伸　「新発田重家の乱と戦国期「新潟」をめぐる攻防」
(『新潟市歴史博物館研究紀要』第8号　2012年)
同　「中世～近世初期、低湿地における「村」の形成過程
―越後蒲原平野の開発と浄土真宗の展開を考える―」
(根岸茂夫他[編]『近世の環境と開発』所収　思文閣出版　2010年)

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
『一般国道8号線　白根バイパス関係発掘調査報告書　浦廻遺跡』
(新潟県埋蔵文化財調査報告書第126集　2003年)
新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
『一般国道8号線　白根バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ　小坂居付遺跡』
(新潟県埋蔵文化財調査報告書第238集　2012年)

新潟県　『新潟県史』通史編1　原始・古代(1986年)
新潟県　『新潟県史』通史編2　中世(1987年)
新潟県　『新潟県史』通史編3　近世1(1987年)
新潟県　『新潟県史』通史編4　近世2(1988年)
新潟県　『新潟県史』通史編5　近世3(1988年)
新潟県　『新潟県史』通史編6　近代1(1987年)
新潟県　『新潟県史』通史編7　近代2(1988年)
新潟県　『新潟県史』通史編8　近代3(1988年)
新潟県　『新潟県史』通史編9　現代(1988年)
新潟県　『新潟県史』資料編24　民俗文化財3　文化財編(1986年)
新潟県　『新潟県史　概説　新潟県のあゆみ』(1990年)

「角川日本地名大辞典」編纂委員会　『角川日本地名大辞典15　新潟県』(1978年)
宮　栄二・山田英雄(平凡社地方資料センター[編])
『新潟県の地名』日本歴史地名大系第15巻(平凡社　1986年)

大熊　孝　「信濃川治水の歴史」(『アーバンクボタ』第17号　1979年)

資料を閲覧するには～新潟市歴史文化課の利用案内

歴史文化課では、新潟市史の編さん過程で収集した資料や、市民の皆様からご寄贈いただいた資料など、多くの歴史資料を所蔵しています。これらの資料はどなたでも自由に閲覧できますので、地域の歴史を調べる際に是非ご活用ください。

■利用日・利用時間

土曜日、日曜日、国民の祝日・休日、年末年始(12 月 29 日から 1 月 3 日)を除く毎日(9 時～ 16 時 30 分まで)

■閲覧できる主な歴史資料（閲覧の際には「新潟市歴史的文書等閲覧請求書」への記入が必要です。）

○図　書　県内外の市町村史や郷土の歴史に関する様々な書籍、行政刊行物など

○古文書　新潟市域の古文書や、絵図・地図などの地域資料
（古文書は、原則として複製資料による閲覧とさせていただきます。）

○公文書　明治時代から昭和期にかけての新潟市役所文書や、新潟市域の旧役場文書

○写　真　新潟市域の明治時代以降の写真

○更正図　新潟市域の旧更正図と旧土地台帳は、横越公文書分類センター（江南区役所横越出張所内）で、整理が完了したものから順次公開しています。閲覧の際には、事前に歴史文化課歴史資料整備担当への連絡が必要です。詳しくは歴史文化課歴史資料整備担当までお問い合わせください。

■資料の複写について（複写の際には、「新潟市歴史的文書等複写許可申請書」への記入が必要です。）

○電子式複写機（コピー機）による複写

複製資料や図書については、電子式複写機での複写が可能です。白黒コピーは 1 枚 10 円、カラーコピーは 1 枚 70 円です。マイクロリーダープリンターでの複写は、1 枚 10 円です。

○カメラによる複写

古文書の原本は、電子式複写機による複写ができませんので、カメラを持参してください。

○データによる複写

古い写真や地図など、一部データ化されている資料についてはデータの複写も可能です。データの複写は、CD－R 1 枚につき 100 円です。

■交通アクセス

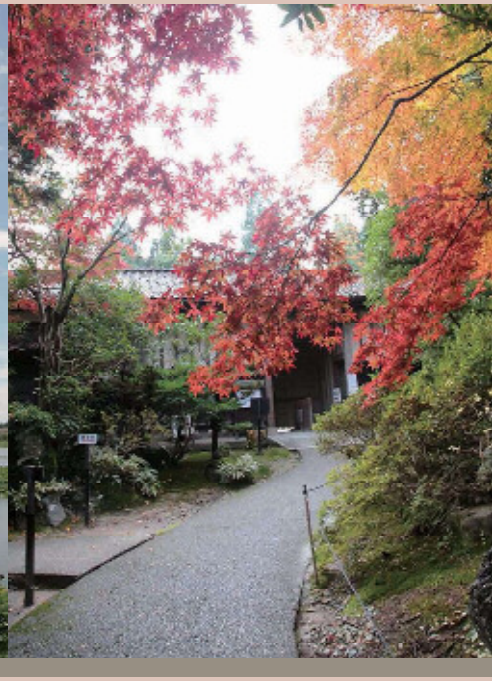
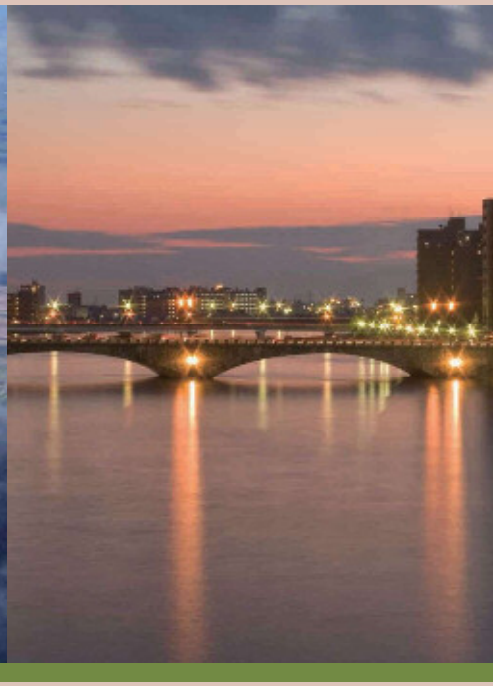
・バスをご利用の場合は、新潟駅前バスターミナル 0 番線または 1 番線発～萬代橋ライン（ＢＲＴ）に乗車、「市役所前」で下車してください(所要時間約12分)。なお、時間帯によっては、新潟駅前発～信濃町線･有明線･西小針線などに乗車、「市役所前」で下車してください。「市役所前」で下車、徒歩約 5 分です。

・電車をご利用の場合は、JR 白山駅で下車してください。北口を出て、徒歩約 10 分です。

新潟市のあゆみ
（増補改訂版）

編集・発行
（平成 28 年 3 月発行）
（平成 29 年 3 月第 2 刷発行）

新潟市文化スポーツ部
歴史文化課
（市役所白山浦庁舎 1 階）

〒951-8131
新潟市中央区白山浦 1 丁目425番地9
電　話　０２５－２２６－２５８４
ＦＡＸ　０２５－２３０－０４１２
Ｅメール　rekishi@city.niigata.lg.jp

印刷：有限会社 スタッフ ラン